

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

※特集

研究評価と「本にすること」

荻谷剛彦 1

学者は——それでも——なぜ本を書くのか…研究評価と学術書

後藤 真 7

人文学の研究を可視化し未来につなぐための評価とその指標

——厚み・質・多様性

佐藤郁哉 14

「論文化」の行き着く先にあるもの

——学術コミュニケーションの植生遷移

鈴木哲也 20

「大きな問い」を取り戻すために

——「ジャーナル駆動型研究」を乗り越える実践を

大学出版部ニュース 28

No.121
2020.1



一般社団法人
大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

大学出版部協会 新刊ご案内

ブックレット第4弾

対立を乗り越える 心の実践

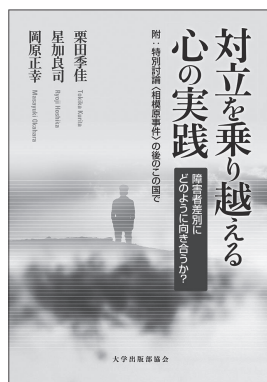
障害者差別にどのように向き合うか？

栗田季佳・星加良司・岡原正幸

大勢の障害者の命が奪われた〈相模原事件〉を起こす影は、私たちの内にある。制度や「ねばならない」的教導では、差別はなくなるない。「潜在化する偏見」を炙りだし、その原因となる心のメカニズムと社会的背景にまで遡って考察することで、差別解消への糸口を考える。

[発行：大学出版部協会／発売：東京大学出版会]

ISBN978-4-13-003153-0 2017年2月刊行
A5判／88頁／本体1,000円＋税



主要 目次

- 第1章 見えない偏見
障害者を取り巻く問題に現れる心の動き（栗田季佳）
- 第2章 バリアフリーという挑戦
「社会を変える」ことは可能か（星加良司）
- 第3章 生の問題として〈対立を乗り越える〉を考える（岡原正幸）
- 第4章 討論
対立を乗り越える学問の挑戦（栗田季佳・星加良司・岡原正幸）
- 第5章 特別討論〈相模原事件〉の後のこの国で
有事モード下の差別と偏見

特集＊研究評価と〈本にすること〉

学者は——それでも——なぜ本を書くのか…研究評価と学術書

荻谷剛彦 (オックスフォード大学教授)

1 ジャーナル駆動型研究とモノグラフ

イギリスの大学は六〇七一年ごとに研究評価を受ける。REF (Research Excellence Framework) と呼ばれる評価の仕組みである。Research Excellenceの文字が躍るように、研究の卓越性を高め、それに応じて大学に国の研究資金を配分するための評価でもある。学問分野にほぼ対応する評価単位 (Unit of Assessment; UOA) ごとに研究成果が集められ、評価が行われる。個人の評価というより、各大学の評価単位に対応する学部や学科に相当する組織を対象とした研究評価である。その結果に応じて、研究補助金の配分が行われるため、各大学の収入にとっても重要な評価と言える。

少しでも高い成果を得ようと、各大学は評価の数年前から準備を始める。研究成果を発表したら自動的にREF評価の候補となるように、教員は大学が運営するリポジトリに出版物を登録する。その研究成果のなかから必要な数の業績をREFに提出する仕組みである。

このREFにおける評価において最も期待される研究業績は、評価の高いジャーナルに掲載された論文である。イギリスのREFを批判的に詳細に検討した佐藤郁哉氏の研究によれば (佐藤二〇一八)、二〇一四年のREFに提出された全業績のうち八一％は論文が占めた。社会科学系に絞っても、八二％にのぼる。しかも、過去に比べてその傾向が強くなっているという。このような傾向を佐藤氏は「ジ

ジャーナル駆動型研究」と呼ぶ。

学術書（書籍）が評価されないわけではない。たとえば、歴史学の分野ではREFに提出された研究業績のうち論文の占める割合は五〇%を切るからである。しかも、二〇一四年からは、学術書一冊が論文二本分とカウントされるようになった（「ダブルカウント」（佐藤二〇一八、三四四頁）。それでも、論文の提出に力点が置かれることは変わらない。

たしかにREFのような評価制度のもとでは、「ジャーナル駆動型研究」が社会科学の分野でも主流となっていることは否めない。だが、それ以外の場面での評価となると、学術書の評価はいまだに重要な意味をもつ、というのが私の経験からの見解である。とりわけ、シニアレベル（従ってそのほとんどはデニユアポスト）のリクルートメントにおいては、「主著」が業績リストのなかで無視できないウエイトを占める（これは日本のことではなく海外の主要大学のことを指す）。私自身が所属する大学での教授職の採用の場面でも、オックスフォード以外の大学から、昇進や採用に際し、外部レフリーとして業績評価を求められる場合でも、主要著書が含まれている。もちろん、有力なジャーナルに掲載された論文がない場合には、いわば「予選落ち」で、ショートリスト（最終段階の候補者）に残らない。大学やケースによっても異なるが、その上で、四、五人の最終選考候補者の業績を評価する際に、各候補者の主著と見なせる学術書の評価が含まれるのである。

そのほとんどは、モノグラフと呼ばれる単著の学術書である。比較的若い候補者の場合には、博士論文をもとにした研究書であることが少なくない。共著の場合もあるが、多数の著者によるものではない。また編纂書に寄稿した論文はほとんど評価の対象にはならない。これはREFと同様である。優れたモノグラフを、著名な大学の出版局（UP）から出版している実績自体が、一つの業績と見なされるのである。厳しいレビューのあるUPから出ているということが、「質」の保証を兼ねると見なされているからである。したがって、博士課程を終えた若い研究者には、博士論文のいくつかの章をもとに、ジャーナル論文の執筆を勧めると同時に、博士論文をもとにモノグラフを執筆し、評価の高いUPから学術書として出版することを助言する。アカデミック・マーケットでの価値を高め、条件のよい研究職に就くための手段として、学術書出版の価値が下がっているわけではない。

2 なぜ学術書（モノグラフ）を評価するのか

では、なぜ採用や昇進人事などの際に、ジャーナル論文だけでなく、学術書（モノグラフ）も評価の対象となるのか。それに答えるには、両者の研究成果として性格や価値の違いについて論じる必要がある。

日本の外で、社会科学系でもジャーナル論文が高く評価されるのは、インパクトファクターに代表される、被引用

件数の多さが研究の価値（他者評価）を示すという、理系の学問に通じた面があるからだ。英語の論文の場合、毎年どれだけ他者に引用されているかが数値化されている。そのようなデータを提供する機関もある。そして、その数値が高いほど、研究のインパクトが強いと見なされる。

ただし、気をつけなければならないのは、理系の研究業績とは異なり、社会科学系の論文のインパクトには、新しい事実の発見による貢献とは別の価値が含まれる場合が少なくないことである。新しい事実や真理の発見、あるいは新技術の開発といったことがまったくないわけではない。だが、インパクトの強い社会科学系の論文では、従来の研究に比べ、新しい見方（理論、概念）を提示し、その見方によってこれまでとは異なる事実の解釈が可能になった場合に影響力が広まる。自然科学のような大発見や大発明ではない。新たな概念や理論枠組みの提示が、ある程度の実証性を持って提出されたときに、インパクトの高い研究となる。たとえば、「弱く絆 weak ties」の強さ（strength）を示したMark Granovetterの論文（1973）は、社会学の分野でもっともインパクトの強い研究といわれる。これはその一例である。

このように「息の長い」インパクトを持つ論文もあるが、息の長さという点では、学術書にも分がある。長く読まれ続けることで、社会科学における理論的思考に影響を及ぼす「古典」となるような著書である。影響の広がりや息の

長さという点で、優れたモノグラフの影響力は無視できない。これだけジャーナル論文が電子媒体で読めるようになって、大学（院）での授業で講読文献として指定されるものに、学術書が含まれるからだ。優れたモノグラフが、狭い専門分野を超えて読まれることも、その価値を高める理由だろう。これらの点で、研究成果の「寿命」や広がりという意味で、優れたモノグラフの価値は高い。このような性格を持つ研究成果だからこそ、人事の場面でも一定の影響力を発揮する。

3 なぜ学術書（モノグラフ）を書くのか

評価という点からジャーナル論文と学術書の違いを見てきた。ここからは、私自身の経験に引きつけて、執筆者という立場から、学術書（モノグラフ）と研究評価の関係について論じてみたい。

イギリスの大学に勤めるようになって、この一年間でさまざまな研究成果を（英語で）発表してきた。レフリー付きのジャーナル論文もあれば、論文集への寄稿も、単著のモノグラフも、編者となって本を出したこともあった。落とされ続けたが、トップジャーナルに何度か論文を投稿し、現在、書き直し中のものもある。

二〇一九年に一〇年近いオックスフォードでの研究成果を日本語で学術書として出版した。四〇〇ページを超える、注の数も相当な単著（『追いついた近代 消えた近代』岩波

書店)である。また、二〇二〇年には、アメリカのある大出版会からモノグラフを出版することが決まっている。厳しいレビューを経た結果である。こちらは、二人の著者による共著で私が第一著者となる。これも結構な分量のモノグラフである。

すでにテニユアを持ち、今後の転職を考えていない、定年退職を数年後に控えた私のような研究者でも、REFのためではなく、学問生産を続けている。その成果発表のために、ジャーナルを選ぶことも、学術出版を選ぶこともある。

出版とは、いうまでもなく読まれることを前提にした行為である。ジャーナル論文の場合には、専門が限定され、手に取る読者も限定的である。学術書の場合にも、ある程度の専門性の限定は伴う。どの専門分野のジャーナルにレビュー論文が掲載されるかによって、誰に読まれるかが違ってくるからだ。優れたUPからモノグラフを出すのも、優れた複数の(できれば多分野のまたがる)ジャーナルでレビュー論文が書かれる可能性が高いと考えるからだ。それだけ注目度も高まることが期待される。

日本語で出版した学術書については、そのようなことはまったく考えなかった。日本語を読める読者・日本の市場に限定した出版だからである。しかも、狭い範囲を超えて読んでほしいと思って書いた。だから、学会誌でのレビューより、新聞や一般の雑誌でレビューしてほしいと思っ

た。学術書の体裁を取っているが、内容の点では広く関心を引くようになってほしいとの願いからである。

いずれの場合も、かけた時間も、結果として執筆した分量も、ジャーナル論文とは桁違いである。「長編」といってよい。それだけの長さになれば表現できない研究成果だと考えた末の結果である。大きな広がりをもたせた枠組みのなかで、できるだけ精緻な分析を位置づけ、その大きな枠組みに応える議論を事実の提示とともに展開する。スケールの点でも、精緻さの点でも、そのようなことはジャーナル論文ではできない。だが、ときとして研究者は、そのような「長編」によってしか表現できない研究成果を世に出したい(問いたい)と願うのだ。

世に出すとは読まれるということであり、読まれるとは当然ながら、そこに何らかの評価が結びつくことである。REFや人事の時のような制度化された評価とは異なる評価がそこにある。狭い意味での内部的な業績評価のためでもない。自分の研究成果の意味や価値を問いたいときに待ち受ける評価が重要なのだ。シニア段階に達した研究者だから可能な贅沢な立場の表明と言われるかもしれない。だが、この年齢になっても、自分が生み出した研究成果を世に聞きたいと願ひ、学術書を出版し続けるのである。

世に出したいと願うのは、制度化された評価とは別に、自分の研究成果の意味や価値を他者に伝えたいからにほかならない。とりわけ英語で学術書を出すのは、その読者の

広がりを考えてのことである。英語ネイティブに留まらない読者の広がりへの期待である。とくに電子媒体でオープンアクセスの仕組みを使った学術書の出版の場合には、その可能性がさらに広がる。まだ見ぬ読者にどう読まれるのか。自分の研究が伝えうるものがそこにはあるのか。目的の限定されたジャーナル論文とは違う読まれ方への期待であり、日本語での出版ではかなわない期待である。

4 学術書と研究評価—日本の場合

これまでの議論をもとに、学術書と研究評価との関係について、今度は日本を前提に考えてみよう。日本の社会科学の分野でも、「ジャーナル駆動型研究」への圧力が高まっているのかもしれない。だが、私自身、日本語でもジャーナル論文や学術書、一般書などを出版してきた経験から見ると、少なくとも私が経験しているイギリスや欧米圏の事情とは異なるところに日本はある。ジャーナル論文といっても、社会科学系ではほとんどインパクトファクターの

ような数字は重視されない（そういう分野もあるかもしれない）。日本語の論文やジャーナルが主である。世界レベルの競争のもっと激しいジャーナルに論文を載せることに比べれば、競争の度合いはおしなべて緩い。大学出版部もあるが、そこでの出版が海外のUPほど権威をもつわけではない。むしろ、レフリーのない民間の出版社での出版の機会が、学術書でも結構あり、大学出版部より権威をもつ場合がある。しかも、REFのような研究評価の制度化が行われているわけでもない。

さらにあげれば、学術書の場合、日本では学会ごとの賞にとどまらず、民間の賞が注目を集める。大手の新聞社や財団が出す賞である。また、「論壇」のようなジャーナルズムとアカデミズムの中間にある「界」が、狭い学問分野を超えて、研究成果の発表の場になっている。シニアレベルの著者の多くが、狭義の学術書ではなく、一般書と学術書の中間あたりの著作を出すのも、いわば学界とは異なる論壇の世界があるからだろう。そこにおける評価は、当然

失われた時を求めて14

見出された時Ⅱ

全14巻
完結!!

プルースト／吉川義訳

【岩波文庫】本体1500円

正確で読みやすい訳文に詳しい図版と訳注、十年をかけて完結。全巻の人名・地名・作品名を網羅した索引付きです。

- 既刊 本体900円〜1260円
- 1 スワン家のほうへⅠ
 - 2 スワン家のほうへⅡ
 - 3 花咲く乙女たちのかげにⅠ
 - 4 花咲く乙女たちのかげにⅡ
 - 5 ゲルマンのほうⅠ
 - 6 ゲルマンのほうⅡ
 - 7 ゲルマンのほうⅢ
 - 8 ソドムとゴモラⅠ
 - 9 ソドムとゴモラⅡ
 - 10 囚われの女Ⅰ
 - 11 囚われの女Ⅱ
 - 12 消え去るアルベルチヌ
 - 13 見出された時Ⅰ



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋
(定価は表示価格+税)

<http://www.iwanami.co.jp/>

ながら狭い専門の域を超える。そのようなことが可能なのも、日本語での読者人口が多いことによる。博士論文を本にしたような純粋な学術書は別にしても、講座やシリーズによる出版の機会も与えられる。新書や選書などでは、一般書より学術書寄りのものでも出版できる。本が売れなくなったとは言え、英語圏での学術書のマーケットに比べればまだまだたいしたものである。そのおかげで、中間レベルの著作が、中堅以上の研究者の出版の機会＝研究成果の発表機会となる。つまり、研究評価は、学界の外にもあるということだ。いや、場合によっては、そのような中間領域や一般書で評価を受ける研究者のほうが、発言力を得たり、学会内部での地位を得たりする。純粋なアカデミックな評価とは別の評価が、日本の研究者の価値の決定に関わっている。

文系学問の場合、このような出版事情の差異が、学術書、

ジャーナル論文、一般書といった、媒体を異にする研究成果の評価のあり方にも影響を及ぼす。概して日本の方が、これらの境界が曖昧で、しかもアカデミックな評価という面では厳しさの点でも競争の点でも甘い、というのが私の印象である。それがいい面もあれば、悪い面もある。出版界の事情と学界の事情との相互の関係を見ないと、日本における学術書と研究評価の関係はわからない。その意味でも、海外における研究評価の様子を知ることが意味がある。

〈文献〉

Granovetter, M. (1973). The Strength of Weak Ties. *American Journal of Sociology*, 78 (1), 1360.

佐藤郁哉編著 (二〇一八) 『50年目の「大学解体」 20年後の大学再生―高等教育政策をめぐる知の貧困を越えて』京都大学学術出版会。

特集＊研究評価と〈本にすること〉

人文学の研究を可視化し未来につなぐための評価とその指標―厚み・質・多様性―

後藤真 (人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館)

はじめに

本章では、特に人文学の研究評価とその根拠となる指標について述べる。この研究指標と研究評価は、現在大学の運営に大きな影響を与えている。一つはこれまでも多く話題となってきた「大学ランキング」を計算するデータの一部であり、もう一つは一部の国立大学で用いられるようになった、研究成果に基づく運営費交付金の傾斜配分である。これらの指標の多くは、一定のデータベースの情報をもとにしており、おおもとは自然科学に関する英語文献の分析を中心としている。後半で詳しく述べるが、その指標自体は必ずしも問題ではない。しかし、その指標の「使い方」

によって、多くの話題（問題）をおこしてきたといえるであろう。とりわけ、非英語圏の人文学は、これらのデータベース類に掲載されにくいという課題を抱えている。そのような状況が影響して、人文学そのものが疑問視されるようになり、現在の「苦境」があるともいえる。この苦境を脱するためには、指標や評価について人文学の側からも考える必要がある。

私はこれまでいくつかのデータをもとに、人文系の研究評価の課題について検討してきた。それらの検討結果に加え、新たな知見をもとに、何をすれば人文学の研究が「見える」のか、それにより人文学をさらに新たな段階へと進めることができるのかについて、検討を加えたい。

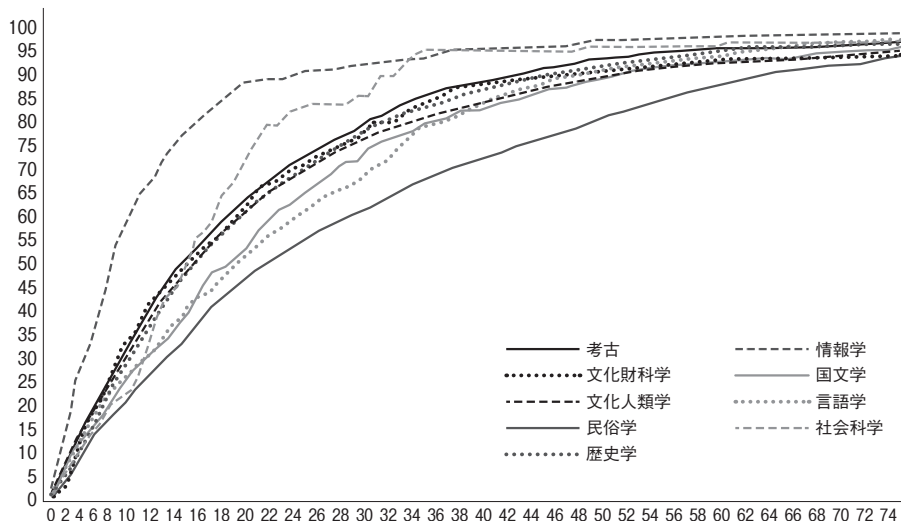


図1 n年以内の論文引用割合（暫定版）

人間文化研究機構リポジトリ及び関連する学術雑誌916本の論文より31933本の引用を抽出

n年以内の論文が引用文献全体の何パーセントを占めるかというグラフの線が早く立ち上れば立ち上がるほど、最近の引用の数が多い

自然科学の多くの分野（ただし、これも全てにあてはまるわけではない）と比較して、人文学についての研究評価の困難さへの指摘は以下のようなものがある。なお、これ以外に言語の問題があるが、それは数量的な問題としては扱いにくいので、ここでは一度おいておく。

- ・論文より書籍が重要である。
- ・共著は少なく単著が多い。結果として自然科学に対して論文の数が減る傾向にある。
- ・自然科学に比して引用の速度が遅い。
- ・人文学においては引用関係を見ることにあまり意味がない。

これらの指摘について、検討結果を簡単に述べ、その後、この検討結果による対応策の一事例を述べる。最後に研究評価と人文学の関係について述べることにしたい。

人文学の研究指標課題と新たな指標の可能性

論文と書籍の関係性

まず、必ず言及される「人文学は書籍を重要視している」と言われるものであるが、これは研究成果の量からも、引用文献の調査傾向からも明確である。筆者の所属する人間文化研究機構の研究成果情報を確認する限り、いわゆる雑

誌論文のみの量と、書籍等の一章を一本（序章等含まず）として換算した量とで比較すると、あくまでも概算ではあるが論文1対書籍2という傾向が生まれる。言い換えれば、論文だけで数字を見た場合、人文学の一部分野では研究成果の三分の一程度しか見えてないのである。また、同じく人間文化研究機構で行った、引用文献の調査では、引用している論文のうち、雑誌論文の比率は日本史学約三五%、日本文学約三五%、文化人類学約二五%、日本語学約四〇%という数字となった。言い換えれば、これ以外の引用先は全て雑誌論文以外のものであることになる。人文学の引用手法として参考文献だけではなく資料類を含むこともあるので、確定とまでは言い切れないが、研究の参考として重視しているのは雑誌論文以外であることは、これらの数字からは間違いのないことである。

人文学は共著が少なく単著が多い。よって論文数がすくない

このこともよく指摘されるが、しかし、論文データベースを見る限りにおいて、自然科学などでも多くの論文の平均著者数は2を超える程度である。自然科学の一分野と人文学を比較してもアクティブオーサーあたりの論文数は二倍などではない。したがって、データ全体に影響を与えるレベルではない。人文学の論文数が少ないのは、研究量が同じであると仮定するならば、論文の「出し方」の違いに求めるべきであろう。

引用を考える

先の引用調査の結果、何年前の論文を引用しているかといった傾向も分かっている。例えば国文学は全引用文献のうち五年以内の研究成果は二五%に過ぎない。言い換えれば七五%以上の引用先は五年以上前の成果である。他の分野も同傾向であるため、より過去の文献も対象としなければ

反穀物の人類史

国家誕生のディープリストリー

スコット 狩猟採集民は穀物栽培を強制する古代国家に抵抗しつつも飼いやられていったとする一大仮説。立木 勝訳 ¥3800

自己責任の時代

その先に構想する、
支えあう福祉国家

モンク 自己責任論も善意の責任否定論も共に錯誤を抱える。皮相な論争を脱し福祉国家のアリズムへ。那須・栗村訳 ¥3600

失われた子どもたち

第二次世界大戦後の
ヨーロッパの家族再建

ザーラ 大戦がもたらした孤児たちはいかにして救われ、保護され、国民と家族の再建がなされたのか。三時・北村監訳 ¥6000

野蛮のハーモニー

ホロコースト史学論集

ストーン 旧東側文書館の開放により研究の革新が進む。歴史を書く・語る行為の方法と思想の最前線。上村忠男編訳 ¥5600

フランクフルト学派の ナチ・ドイツ秘密レポート

ノイマン他 ナチス敗北を想定し戦後処理のためドイツ亡命知識人が書いたアメリカ戦略情報局秘密文書。野口雅弘訳 ¥6500

身体植民地化

19世紀インドの国家医療と流行病
アーノルド 英国植民地下の疫病対策と医療をテーマに、帝国支配が人々の身体にまで及んだことを実証。見市雅俊訳 ¥7600

人種と歴史/人種と文化

レヴィ=ストロース 自民族中心主義の幻想性を突き、文化の多様性を断固擁護。新訳新版、新序文。渡辺公三・三保元他訳 ¥3600

東京文京本郷
2丁目20-7
tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税別)
www.msz.jp

みすず書房

ばならないのは間違いない。また、引用を見ることがの意味については、研究者ごとの被引用者数を日本史学の文献でカウントした。その結果、概ね重要な研究をしているとピアレビューでも見なされている研究者は引用回数が上位に来ることがわかった。このことから引用により重要な論文や研究を評価することは一定程度で可能である。ただし、それは英語の文献のみでは困難であり、日本に関わる研究であれば、日本の文献のデータベースを作らないと見えてこないのも事実である。また、重要な課題として、被引用者上位は「メインストリーム」の研究であることと、物故者を含む多くの「現役でない」研究者が多く含まれている点はおさえておく必要がある。また、海外との比較という観点では、引用文献が言語単位となってしまうため、限界がある。

新たな指標の可能性

私は、上記のような特性をふまえ、新たな指標の可能性を検討している。(内容も成果の出方としても)多様な人文学の研究成果を総体的にとらえることが必要である。しかし、現在引用を見ることが極めて困難であるとともに、効果が限定的であることをふまえ、まずは研究活動量について、試算を作ることとした。具体的には、論文に加え、著書(専門書・一般書・資料集等)、展示、研究映像、審議会での活動や新聞書評なども、人文学では重要な成果であり、これ

らを論文と同様に数えることを試みる。また、人文学では社会的インパクトや地域貢献なども重要な要素となるため、これらも同時に計測することを検討した。具体的には、上記の多様な研究成果や社会的活動全体をすべて計測し、一つ一つの成果に対して、目的に応じた係数をかけることで算出しようというものである。例としては以下の通りとなる。

例..研究であれば論文1に対して著書8、展示は研究活動を0・8とし、社会的成果を3として仮の活動量を計算し、それを係数とする(あくまでも現時点では例示であり、なんらの確定的な意味を持たない。また、計算をわかりやすくするために研究者としているが、本来は研究機関単位で行う想定である)

ある研究者が一定の期間で 論文三本、学術単著一冊、一般向け著書一冊、新聞執筆を五本、自治体の審議員を三回任じられている場合

研究量指標 $\cdots$ (三本 $\times$ 係数1) + (一冊 $\times$ 8) + (一冊 $\times$ 0・8) + (五本 $\times$ 0・3) + (三回 $\times$ 0・4) $\parallel$ 14・5

社会活動指標 $\cdots$ (三本 $\times$ 0・3) + (一冊 $\times$ 0・5) + (一冊 $\times$ 8) + (五本 $\times$ 6) + (三回 $\times$ 4) $\parallel$ 43・4

これに加え、地域貢献なども計量化することで、人文学

の研究者の「活動の可視化」を試みることを目指している。この指標自体が「研究力」のすべてを示すとは考えていない。しかし、私たち人文学の研究者の成果を見せ、様々な情勢に対応するためには重要なことであると考え、まずは議論のためにもこのような考え方を提案している。

人文学研究の質・多様性と厚みの可視化

上記のような提案を行うに至った、研究評価・指標と人文学の関係について述べたい。

現在、話題となっている研究評価という「概念」には、複数の前提が隠れている。それらの前提の多くが自然科学の一部の分野をもとにしている。それは「その分野の評価をするために」作られたものである。その評価自体は問題というわけでは決していない。その分野の前提があるものを、他の分野でも無理に使おうとするために問題が生じるのである。

例えば、論文の量や引用数を指標として、研究の評価ができるという前提には、「研究が進めば論文を書く」「その分野でよい論文であれば引用をする」という、一定の前提が隠れている。その前提をもとにして、論文数が多ければ研究が進んでいる、ないしは研究活動が活発で「あろう」ということを評価できているのである。したがって、研究が進んだ結果でも論文を書かず書籍や他の媒体を使って公開する分野については、前提が異なるのでこれらの指標を用いることはできない（なお自然科学であっても、これらの前提については常に見直しがなされており様々な指標が随時検討されていることも付け加えておく）。

それ以外にも

・議論の進め方は同じであるため、最も多くの読者がいるであろう英語での文献のデータを採ることです
計的に有意な数字が取れる

・研究の速度（とそれにもなう論文量の多さ）により、

田中正司著

A5判・四〇〇頁・本体七二〇〇円十税

アダム・スミスの自然神学 《増補第三版》

——スコットランド啓蒙と法学の近代化の帰結——
近代化に伴う腐敗の問題に対する応答の書であった次第を確認。

安井俊一著

四六判・一九二頁・本体二〇〇〇円十税

J・S・ミル社会主義論の展開

——所有と制度、そして現代——
人類の歴史の根底にある所有と制度の問題から現代を考える

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751 FAX03-5684-0753

馬場宏二の経済学研究の紹介・検討と解明を試みる 現代世界経済 馬場経済学の射程

小澤健二・小林襄治・工藤章・鈴木直次著

本体六四〇〇円十税

序 グローバル資本主義段階 小林襄治／Ⅰ 馬場理論の形成と展開 深化・追遙 小林襄治／Ⅱ 世界経済論と段階論 工藤章／Ⅲ アメリカ資本主義の歴史的特質 鈴木直次／Ⅳ 社会編成論としての馬場の現代資本主義論 小澤健二

概ね三、五年程度の引用分析で、その論文の質が（分野補正を行うことで）計れる

などもある意味では「前提」である。

さらに言えば、これらの指標が持つ大きな前提として「大学等の研究機関に所属する研究者」を中心としていることも忘れてはならない。これらの指標群はあくまでも研究機関を分析するものである。自然科学系の多くの分野は（すべてではない）、実験機材などの環境に影響されるため、研究者＝研究機関に属するものであることが多い。したがって「研究機関や研究者の評価」＝研究評価という言葉が用いられている。

この部分も人文学では前提が異なる。まず研究機関の広がり異なる。日本史学などであれば自治体の博物館等にも研究者がいる。これらはいわゆる大学の研究評価と同様のものを受ける対象ではない。また、さらに言えばいわゆる「在野」の研究者の広がりも大きく、当然彼らも機関の研究評価の埒外である。

「研究評価」という言葉を通常用いて検討を行う際、その前提に「大学等の研究機関における」という言葉が隠れている。しかし、一方で人文学の研究者はそれらの前提を共有しておらず、結果として「研究は評価すべきものではない」という理解が生まれてくるのではないだろうか。まずは、人文学の側でも「今指標とされているものはなにか」

を知っておく必要がある。

一方で、人文学の「機関の力」を効果的に見せることに對しても、現在の情勢を考える限りでは対応せざるを得ない。そのためには、私たちが研究を行い、その成果を社会に見せるという活動の後ろにある前提を改めて理解し、それを可視化することが必要である。例えば、私たちは研究が進めば何によって、その成果を学界ないし社会に問うのだろうか。私たちは良い研究に対して何をもって評価を行っているのだろうか。それを一定の組織や人文学という学問全体の力として見せる際の最大公約数は何か、など、考えるべきことは多くある。

先述の私見による指標はあくまでも「活動量」を総体的に把握しようという試みである。例えば研究が進むことによって、論文ではなく資料集を出すこともある。そのような人文学の活動の前提を吸収する試みなのである。一方で、この考え方は研究の「質」をとらえきれているわけではない。「良い研究を良い研究とはつきり評価する」ためにも、これらの前提を読み解き、表現する方法が引き続き求められている。

実際、人文学では特に優れた研究については、評価の方法は明確に存在し社会的認知を得ている。例えば大型の学術賞は毎年新聞を騒がせる。人文学にはノーベル賞こそないものの、非常に権威の高い賞があるのも事実である。また、優れた社会的還元も、多数の書籍販売などで可視化さ

れることも多く見られる。考古学の歴史的な発見での現地説明会には多くの人が訪れる。

課題となるのは、これらの特に優れた研究を支える、日常の多くの研究をどのように見せるかという点である。人文学のすそ野の広がりや多様性が、優れた研究のもととなつていくということを、いかに見せていくかが重要な課題となる。自然科学における研究評価の文脈においても、近年「厚み」という概念が出されている。この「厚み」という概念は研究量と質（引用情報）を掛け合わせたものだが、人文学の場合には、これに多様性を加えた概念を提案することが重要であると考える。

多くの分野の多くの研究者が研究機関について、研究機関に属さない多様な研究者とも交流しつつ研究を生み出す。その研究の成果も多様な形であり、それらの多様性の中からとくにすぐれた研究成果が生まれるという全体の流れの

可視化が必要である。その多様性こそが質であり、研究機関の重要な評価ということになると、大学等の研究機関における人文学の位置づけの「苦境」への一定の対応も可能になるのではないかと考える。それは、人文学と自然科学などの関係はもちろん、人文学そのものもつ豊饒さを見せる方向になることが望ましい。その可視化の結果は、持つ前提が異なるため、分野間比較は難しいかもしれない。しかし、人文学の研究機関の強みを国際的に比較するなどの可能性は秘めているのではないだろうか。

広がりとは多様性こそが人文学にとつての「質」でもあり「厚み」でもある。研究評価や指標は、どこから一方的に行われるようなものだけではない。私たち人文学研究者が、自律的に未来を作り、守るためにも必要なものなのである。

特集＊研究評価と〈本にすること〉

「論文文化」の行き着く先にあるもの

— 学術コミュニケーションの植生遷移 —

佐藤郁哉 (同志社大学商学部)

まだ本なんか……

英国の代表的な高等教育研究者ロナルド・バーネットはある学会の講演で、アイロニーをこめて次のように述べたとされる——「研究室で本を読んでいるところを同僚に見つけられたら恥ずかしい思いをするに違いない。実際、我々は本を読むのでなく、論文を書くべきなのである」。

若干の誇張が含まれているのだろうが、このバーネットの指摘には、まぎれもなく、いま世界的規模で進展している学術論文中心の研究評価とそれにもなう研究業績の「論文文化」の行き着く先が示されている。それはまた、論文掲載至上主義とでも呼ぶべき動向がさらに強い影響力を

持つていくようになった場合に日本の大学セクターにおいて生じる事態を予見させるものでもある。

つまり、日本でも、研究者であれば同僚や役職者から、学生・院生の場合には指導教員や同輩などから「まだ本なんか読んで（書いて）いるの？」と揶揄されるような時代が目前に迫っているとも考えられるのである。

研究評価制度と研究業績の「論文文化」

右のバーネットの発言の背景には、英国でおこなわれてきた研究評価事業がある。

英国では一九八六年いらい数年おきに全国規模で大学とその学部を基本単位とする研究評価がおこなわれてきた。

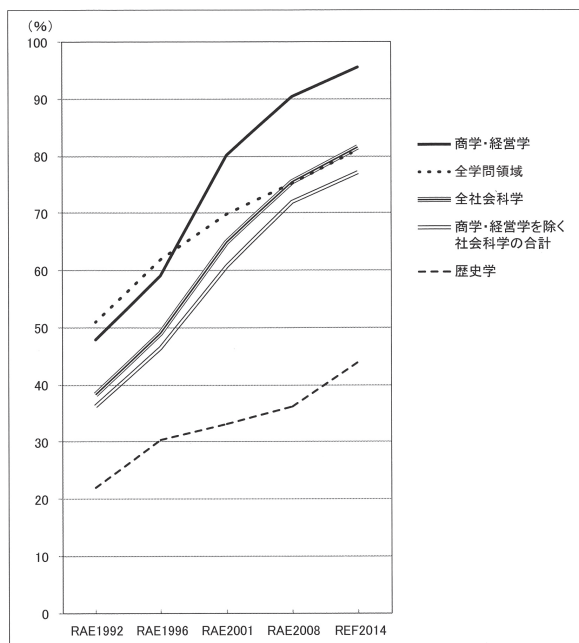


図1 研究評価事業に際して提出された業績における論文のシェアの推移
出所：佐藤郁哉編著（2018），p.285

その結果は、政府から各校に対して割り当てられる研究用補助金の配分額を決定する上で重要な役割を果たしてきた。

評価事業の名称は当初 Research Selectivity Exercise (RSE) というものであったが、一九九二年の第三回目からは Research Assessment Exercise (RAE) という名称が使われるようになった。RAEは、その後計四回おこなわれ、それぞれ実施年との組み合わせで「RAE1992」や「RAE2008」などと表記される。そして、二〇一四年には、幾つか重要な変更が加えられた上、Research Excellence Framework (REF) と改称された評価事業 (REF2014) が実施され、現在は REF2021 に向けて作業が進められている。

これまでに計七回おこなわれてきたこの評価事業は、英国における学術研究のあり方に対して様々な面で意図せざる結果をもたらしてきたとされる。その中でも最も顕著なものの一つが、人文社会系の学問領域における「論文化」、つまり研究業績においてジャーナル論文が占める比率の増加である。

全体的な傾向と学問分野による違い

図1は、一九九二年以来五度にわたる評価事業に際して提出された研究業績の中における論文のシェアの推移を、商学・経営学、全学問領域、社会科学全体、商学・経営学を除く社会科学の合計、歴史学という五つのカテゴリーに分けて集計した結果を示したものである。

ここで特に商学・経営学と歴史学を取りあげているのは、この二つの学問領域が論文化という点において対照的な傾向を示しているからに他ならない。

実際、この図にみるように、商学・経営学分野の場合、RAE 1992では提出業績のうち五割以下に過ぎなかったジャーナル論文の比率は、その後急速に増えていき、REF 2014では九六％近くを占めるまでに至っている。それとは逆にシエアを急速に落としていったのが書籍である。RAE 1992では提出された業績の中で書籍と書籍の章がそれぞれ二割に近いシエアを占めていた。これに対して、REF 2014では、書籍と書籍の章は、それぞれ一・三％と一・五％、つまり二％以下の水準にまで落ち込んでいる。

この商学・経営学分野に見られる論文化の傾向は、他の学問領域にくらべて突出したものだと言える。もっとも、論文化それ自体は、他の分野でも同じように観察される。実際、図に見るように、各大学から提出された研究業績の中で論文が占める比率は、RAE 1992の時点では五割程度に過ぎなかった。それが、評価事業が回を追う毎に拡大しつつ、REF 2014には八割を越えるまでになっている。商学・経営学分野とは対極の傾向を示しているように見える歴史学の場合でさえ、一九九二年の時点では、全提出業績のうち二割を少し越える程度に過ぎなかった論文の比率は、REF 2014では四四％にまで増えているのである。

論文化の背景としての研究評価事業

当然ではあるが、図1に示されたデータだけを見て、「英国ではあらゆる研究活動において『論文シフト』が進んでいる」と見るのは早計である。もっとも、英国の大学人の多くにとって研究評価事業は、研究活動の焦点という点でも、またアカデミック・キャリアの規定因という点でも最大の関心事だと言える。

この点を象徴的に示しているのが、RAE-ableな／REF-ableな／言葉である。

この言葉は、研究業績自体の質とその業績を生み出す研究者の能力・実績という二つの意味で使われることが多い。前者の場合、RAE-ableな／REF-ableは、「評価事業に際して好評価が得られる研究業績」という意味になる。一方で後者の場合、RAE/REF-ableは、「特定の研究者が、研究評価事業で好成績をおさめる可能性のある業績を量産できるだけの能力と実績を持っている」ということを意味する。

先に述べたように、研究評価事業の「成績」は、各大学に対して配分される補助金の額を左右する。また、その成績は、マスメディアなどが作成する大学ランキングにも反映される。それをもって、大学における採用・昇進人事に際しては、その人物が「RAE/REF-ableな人材であるか否か」が重要な判断基準になってきた。逆の面から見れば、RAE/REF-ableではない人材は、学部ないし大学の研究戦略

上で「戦力外」扱いされるということにもなる。

したがって、英国の大学はいかにしてRAE/REF-ableな教員を採用し、また他大学への移籍を未然に防ぐかという点に腐心することになる。一方で、個々の研究者にとつては、RAE/REF-ableな業績を一定の期間内に生産していくことが死活問題となる。

評価事業と人事審査における論文の位置づけ

——丸投げ式の「客観的」評価？

そして、研究評価事業が回を重ねる度に、その「RAE/REF-ability」を左右する要因として中心的な位置を占めるようになったのが論文の刊行実績である。つまり、英国の大学セクターでは、論文、特にジャーナルランキングなどで上位にある学術誌に掲載された論文こそがRAE/REF-ableな業績であるという認識が広まっていたのである。

これには、幾つか理由がある。

主な理由の一つは、評価事業の対象となる業績の点数で

ある。RAE/REFに際しては原則として研究者一人あたり四点の研究成果を提出することになっていた。したがって、大学教員は、四〜五年のサイクルでおこなわれる評価事業の期間中に、最低でも四点の業績を刊行しなければならない。ここで銘記すべきは、その研究成果については、数ページの論文も数百ページの書籍も同じように「一点」として扱われるということである。このような業績量産のプレッシャーは、研究業績の急速な論文文化を促してきた重要な要因の一つであると考えられる。

研究成果の点数という点に加えて、論文文化は、業績評価の技術的な問題とも密接に関連していると考えられる。

英国の研究評価事業の多くは、二重のピアレビューとしての性格を持っている。つまり既に査読を経て刊行された著作物を「パネル」と呼ばれる評価委員会が審査することになるのである。その委員の多くは、数ヶ月のあいだに数百点の業績を評価しなければならない場合も多い。

論文の形で刊行された研究業績の場合は、その評価作業

「令和」を迎え「平成」を網羅した
14年ぶりの増補新版！

日本史総合年表

【第三版】『内容案内』呈
加藤友康・瀬野精一郎・鳥海 靖・
丸山雅成編 旧石器時代から令和
改元 2019年5月1日まで、約41000
項目を収録。 特価15000円
(20年2月末まで。以降18000円)

大学アーカイブズの 成立と展開

公文書管理と
国立大学
加藤 諭著 各大学の事例を挙げ
、大学アーカイブズの真の意義
や可能性を解明。 11500円

戦後日本の 教科書問題

石田雅春著
9000円
日教組と文部省の対立や教科書無
償化、家永教科書裁判などの諸問
題を分析して実態に迫る。

文化遺産と(復元学)

遺跡・建築・庭園復元の理論と実践
海野 聡編 何のため、いつの時
点へ、どう戻すのか？ 4800円

核軍縮の現代史

北朝鮮・ウクライナ・イラン
瀬川高央著 関係諸国がいかに核
拡散の脅威を低減する合意を成立
させてきたかを解明。 1900円

モノのはじまりを 知る事典

生活用品と
暮らしの歴史
木村茂光・安田常雄・白川郁達夫・宮
瀬文二著 私たちの生活に身近な
モノの誕生と変化、名前の由来、発明
者などを通史的に解説。 2600円

日本の食文化 全6巻完結！

各2700円 『内容案内』呈
①菓子と果物 (最終回)
関沢まゆみ編 魅力的な嗜好品で
あった甘味の歴史と文化を描く。
〈既刊〉①食事と作法…小川直之編 ②
米と餅…関沢まゆみ編 ③麦・雑穀と芋
…小川直之編 ④魚と肉…藤井弘章編
⑤酒と調味料、保存食…石垣 悟編

刀剣・城郭・地図など付録を大増補 歴史手帳

2020年版
1100円

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151/価格とは税別

に要する時間や労力を大幅に節約できる可能性が高い。というのも、わざわざ論文を丹念に読み込むという手間をかけなくても、ジャーナルの格付けやインパクトファクターを参照すれば、最終的な評価点の目安をつけることはきわめて容易だからである。

同様の点は、個々の大学における人事評価についても言える。実際、論文の中身というよりは、その論文が掲載された学術誌の卓越性^{エクセレンス}の度合いを代理的な指標として使うことができるのであれば、採用人事や昇進人事に関する意思決定は、より「客観的」なものに出来る。また、それによって、人事上の意志決定をめぐる責任問題や厄介な政治的な対立を避けることも可能になる。

このようにして、論文の場合は、評価実務の多くを外部に「丸投げ」にすることも出来るのである。また、それによって評価作業の能率化・合理化・客観化が図れる。それに対して、書籍の場合には、実際の中身にまで立ち入って「人が人（の業績）を評価する」ことにまつわる数々の問題を避けることは非常に難しいだろう。

日本における学術コミュニケーションの近未来

以上の点を考え合わせてみれば、英国における研究業績の論文化はほとんど不可避のようにも思えてくる。いずれにせよ、英国の学術界と学術コミュニケーションの世界では、この三五年あまりのあいだに大がかりな「植生遷移」

が生じてきたと見る事ができる。

かつて英国の学術界では、論文だけでなく学術書やハンドブック、教科書など様々な研究業績が、それぞれ重要な機能を持つ発表媒体として評価されていた。それは、多種多様な植物が互いにせめぎ合いながらも共存する植物相^{フロラ}にも喩えられる。そして、その豊かな植物相は、それを支えする肥沃な土壌である学術コミュニケーションの場を再生産していたと考えられる。

一方ある時期からその場合は、単一の植物種Ⅱジャーナル論文によって埋め尽くされた「植生」へと遷移していったのである。もちろん、英国では未だに優れた研究書や教科書が刊行され続けている。しかしもしかしら、それらは、一面に展開する論文の平原の中にごくまばらに点在する数本の樹木のようなものに過ぎないのかも知れない。

ひるがえって、日本の場合はどうであろうか。

幸か不幸か、まだ日本では英国ほどには論文化が進んでいない。実際、日本の大学ではむしろ書籍というものが、今なお教員の採用や昇進の際におこなわれる業績評価の際に重要視されている場合も多い（「ファスト新書」的な薄手の書籍が主著として大学のウェブサイトに掲げられている例さえある）。

しかしその一方で、今後日本でも英国と同じような事態が生じていく可能性は十分にあるだろう。たとえば、日本では官民ともに世界大学ランキングへの関心がますます高まっている。また、各種補助金の配分などについてもジャ

「ナル論文の多寡が「加点」の規準として重視されるようになっていいる。さらに、高インパクトのジャーナルに論文が掲載された場合に研究費が加算されたりサバティカルの権利が与えられる大学や学部も出てきている。

このような趨勢を見る限り、日本でもそう遠くない将来に、「エクセレントな研究業績」と「ジャーナル論文」とがほとんど同義のものとなっていく、一方で、学術研究の発表媒体としての書籍は前世紀の遺物のようなものになっていく可能性は十分にあるだろう。つまり、同僚や指導教員あるいは共同研究者に「まだ本なんか読んで（書いて）いるの？」と言われる時代が来るのかも知れないのである。

そのような変化が日本の学術界のあり方に対してどのような影響を与えていくか、という点については予断を許さないところがある。しかし、これだけは確実に言えそうなのが一つある。つまり、発表媒体の多様性の喪失は学術コミュニケーションの基盤の崩壊に結びつく可能性がある、ということである。

それは、単一栽培^{モノカルチャー}がしばしば連作障害、つまり土壌の荒廃を引き起こしていく事態にも喩えられる。見渡す限り論

文によって埋め尽くされた学術界は、合理的で客観的な基準によって整然と区画され整備された農園のようにも見えらるだろう。しかし、その人工的な圃場（とその耕作者）の「地力」は、既に取り返しのできないレベルにまで低下しているのかも知れない。

近年、いわゆるpredatory journalに掲載された論文が、各種助成金の申請書は言うに及ばず、大学をはじめとする研究機関における採用・昇進人事に関する文書などにすら「査読付の研究業績」の一部として記載されるようになっていいる。私には、この種の「ハゲタカ」の増殖と跳梁は、論文掲載至上主義が日本の学術コミュニケーションに引き起こしつつある植生遷移の行き着く先を示す不吉な予兆であると思えないのである。

（本エッセイは、佐藤郁哉編著（二〇一八）『50年目の「大
学解体」 20年後の大学再生』（京都大学学術出版会）の第四章および佐藤郁哉（二〇一九）「誰にとつての質？ 何のための卓越性？」（『組織科学』第五二巻第四号）を下敷きにして
いいる。）

特集＊研究評価と〈本にすること〉

「大きな問い」を取り戻すために ——「ジャーナル駆動型研究」を乗り越える実践を

鈴木哲也（京都大学学術出版会）

■研究現場から「大きな問い」が消えている

私は、今日の大学・研究評価の在り方に対して、最も明示的に系統的に、そして自省的・実践的に批判してきた出版人の一人である、と主張して、おそらくどなたも異論は無いだろう（鈴木二〇〇二、二〇一六、二〇一八；鈴木・高瀬二〇一五など）。その私が、とりわけ実践的に、つまり編集現場の方法論に関わる事柄としてこの問題に正面から取り組む切っ掛けになったのは、二〇一一年のことである。

この年、私は人文・社会系の五研究科長の先生方と図って、若手研究者の優れた単著を出版するための助成制度を京都大学の中に作っていただいた。発行元は問わない制度

ではあるが、すでに、京都大学学術出版会からは一〇二冊の研究書が刊行され、少なからぬ成果（たとえば出版賞・学術賞の受賞は二二件）を挙げたが、その分、私たち編集者は、刊行できなかつたものも含めて、それ以前の数倍に及ぶ多数の著作、多くは博士論文にコメントする義務を負ったのである。そしてそうした機会を与えられてすぐ、私は、あることに気づいたのだ。

中には非常に優れたものがある。大学院重点化のもたらした負の側面もしばしば指摘されるが、大学院定員を増やしたことでそれだけ人材が厚くなったのも確かだ。特に、出身学部は京大ではない方、あるいは女性の研究者のお仕事に優れた作品が多い。たぶんそれまでの、事実上学部か

ら連続ししかも男社会の大学で、「お師匠さん」から示唆された研究を諸々と続けてきたという者とは違って、「なぜあなたはそうした研究をするのか？」といつも周囲から問われてきた人たちだからなのだろう。今までになかった方法論、あるいは視点を意識的に追究して来られた故のことだと思う。

けれども一方で、「これはいかなものか？」と小首を傾げざるを得ないものも少なくない。そうした論文に共通するのは、ひと言で言えば「大きな問い」の欠如である。実際著者に面談をして「なぜこの研究をしたのですか？」と尋ねてみると、例えば、「学界でこれが今課題になっているから」というような言い方が返ってくる。「その課題に関わって、ある地域のある時代のこんな資料が見つかった」ので、それを対象にしたのだと。それはもちろんいいのだけれども、私が聞きたかったのは、むしろその研究が狭い専門領域を越えてどういう影響を与えるか、ということだ。多くの場合、尋ねている私は門外漢だが、そうした専門外の、しかし知的好奇心はある者が何を学べるか、ということを知りたいのだが、そうした答えは返ってこないこともしばしばなのだ。

こうした傾向は、佐藤郁哉氏が指摘し、本誌誌上で荻谷剛彦氏が問題にする「ジャーナル駆動型研究」（佐藤二〇一八）の横行と根を一つにする。すなわち、内在的な好奇心や社会的要請が研究を促すのではなく、「学術雑誌に如何

にアクセプトされるか」、すなわち、同業者間の現在の研究トレンドに合致した形で「意味ある仕事をする」ことが研究を駆動しているということだ（Kamasma 2014）。実際、佐藤郁哉氏によれば、英国の経営大学院では「①まず、どの学術誌に投稿するか決めよ、②その学問領域の相場について見きわめよ、③研究をせよ、④研究結果の中から、選んだ学術誌の相場観にうまくフィットする部分を抜き出せ、⑤論文を書いて、その学術誌に投稿せよ」という指導がなされているのだという（佐藤二〇一八）。まるで大学入試の「傾向と対策」を聞いているようだ。

■「ジャーナル駆動型研究」の実態と弊害

こうした「ジャーナル駆動型研究」が、果たして、学術コミュニケーションにおいてどのように扱われているのか。興味深いデータが、他ならぬ『Science』誌上でいくつか報告されている。一つは、論文引用の領域と期間の狭隘化（narrowing of science and scholarship）を指摘したシカゴ大学のエバンズによるもの（Evans 2008）で、これはすでに私も何度か紹介し（鈴木二〇一六、二〇一七、二〇一八）、本誌一一八号でも橘宗吾氏が触れている（橘二〇一九）から割愛するとして、より視覚的に首肯しやすいハミルトンの報告を紹介しておこう。

図1は、Citation IndexのデータベースすなわちSCI、SSCI、AHCIを用いて明らかになった、「一度も引

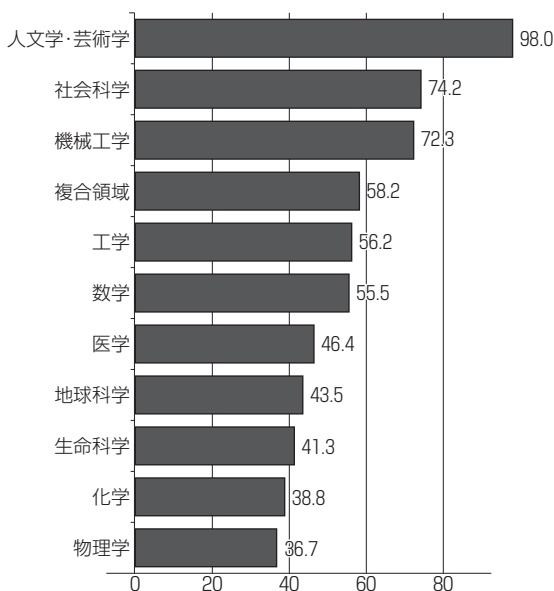


図1 「一度も引用されない論文」の割合
Hamilton (1991) より

用されない論文」の領域別の割合である (Hamilton 1991)。一見して分かるように、理系のいくつかの領域を別として、実は、ほとんどの論文は、一度も引用されていない。もちろん、このデータをもって人文学を「愚かで無意味」と攻

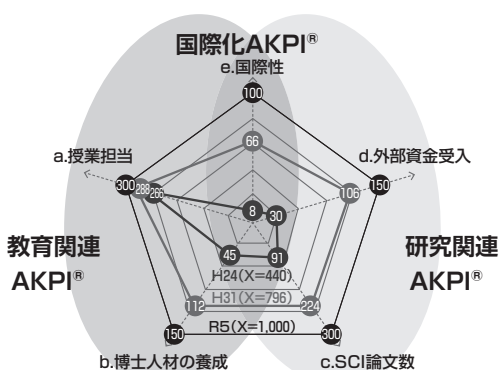


図2 広島大学が進める教員評価のための「目標達成型重要業績指標」
広島大学ホームページより

撃したチェイニーのように (Clency 1991)、「引用されない」「意味がない」と考えるのは誤りだ。雑誌論文はその性格上、纏まった研究成果というよりは、大きな研究課題の一部や研究の途中経緯を速報したものが多くなる傾向がある。

自然科学の場合、仮に速報であっても、自らの研究の対照やガイドとして扱うことには意味があり、またプライオリティを尊重するという点でも参照しなければならない。しかし、人文学の場合は、むしろ、速報ではなく纏まった成果（それは本の形で刊行されることが多い）を引用することが普通だからだ。

それにしても、このように実はほとんど引用されない論文の集積であるSCIやSSCI、AHCIを下敷きに研究を評価するのは、いかがなものだろうか？ このグラフを見れば、疑いを持たずにいられない。

しかし、研究現場の現実を図2の如し。これは、広島大学の「スーパードグローバル大学創成支援事業」のホームページに掲載されている図なのだが、同大に拠れば「一〇年後に世界top100の大学となること、および、研究と教育の両面において大学として最大の結果を出すため教員を適切に配置できるように」設定された、同大独自の目標達成型重要業績指標（AKPIR®）であるという。そして、図の右「研究関連AKPIR®」の説明には「SCI論文一報当たり一〇〇ポイントとします。本学が世界top100に入るためには、少なくとも、年間五四〇〇報程度の論文数となる必要があります。教員一人当たり三報平均、ということになり、それを三〇〇ポイントとします。」とある。図1と合わせて見れば、失礼ながら失笑を禁じ得ないが、私がより深刻だと思ったのが、その直上の項目である。すなわち、「外

部資金受入…一〇年後には外部資金の総額を二七〇億円程度とすることを目指します。教員一人当たり約一五〇〇万円で、これを一五〇ポイントとカウントします。」

もちろん、自然科学系、特に実験系・観測系の研究には多大な費用がかかる。たとえば、大強度陽子加速器施設（J-PARC）の年間予算をみると、およそ二〇〇億円の事業費のうち、四分の一は電力代、その他併せて八割前後がハードウェアの維持のために使われている。同じように、生命科学の研究で高価な薬品や分析器を用いるのは不可欠なことである。だから金が必要だというのには納得するが、「獲得資金一五〇〇万円で一五〇ポイントを教員評価とする」のは、余りに理不尽だろう。そんな高価な施設や薬品を必要としない研究は、理系の中にさえあるからだ（たとえば農業経済学、建築史、生命倫理等々）。

そして問題は、こうした、すべて「ポイント」換算、要するに経済価値に模して測ろうという、評価方法・評価思想の問題なのだ。「ジャーナル駆動型研究」がもたらす最大の弊害は、「測れるもので測る（あるいは測れるものでしか測らない）」ことで見えてくる「現実」（というより現実のごく一側面）をあたかもご老公の印籠の如くに示して、全てを支配しようとする、精神の貧困と言って良い。

荻谷剛彦氏が鋭く指摘する日本の高等教育に根深い無益な「キヤッチアップ」意識（荻谷二〇一九）と、そこに付け込んだ「多国籍出版情報コングロマリットのコンサルテ

イング」(鈴木二〇一六)に踊らされたとは思えないこの学内政策に、広島大学の構成員が、どのような考えをお持ちかは私は知らない。しかし、「SCI論文一報で一〇〇ポイント」「獲得資金一五〇〇万円で一五〇ポイント」という思考が、およそ学問領域を越えた相互理解や知の融合を促進するとは思えない。むしろ、領域間の垣根を高くし、有体に言えば、研究グループ、研究者個人の不毛な競争を激化させるに違いない。そしてそうした状況は、「高度専門化の罠」に落ちた世界の姿(テット二〇一六)と見事に重なる。

■安全な社会が必要とする領域間の対話

フィナンシャル・タイムズ米国版編集長として、政治、経済、行政に根を張る「タコツボ化」が引き起こす問題を抉り出したテットのレポートの内容は、ぜひ同書を読んで知っていただくとして、私がここで重視したいのは、テットの学問的な出自が文化人類学だということである。もし彼女の専門が金融経済学だったなら、おそらく、あのようなベストセラーは書けなかったろう。「Bean-counter」(計量化と経済的合理性でのみ物事を評価する輩を英語では豆勘定と揶揄するらしい)の視点や手法では、個人間の相互行為の集積としての組織の行動、意思決定の問題は見えてこないと思うからだ。問題の根本を抉るには、それを抱える領域の外側からの視点が有効なのである。そして問題が複雑さを増

せば増すほど、「タコツボ化」を乗り越えた、多角的な視点とアプローチが必要になる。例えば、私たちがこの数年の自然災害で痛感したような、安全な社会の構築のための対策などは、その典型的な問題群だろう。

深刻な河川決壊の現場を前にして、徹頭徹尾「テクノロジー」(あくまで括弧付きなので誤解のないように。多くの工学者は当然、環境に配慮しておられる)を優先させて対策を考える――たとえば強引に流路を直線化し巨大な堤防を築く――

ことは可能であろう。実際、東日本大震災の後、宮城県では海岸線に延々と伸びる高い防潮堤が計画され、県と地元が深刻に対立した地域もあったようだ(田中二〇一四)。しかし、果たしてそれは妥当なのか、という疑義もすぐに沸き起こる。仮に数百年に一度の水害には耐えられたとしても、数千年に一度の災害、たとえば二〇世紀実際に起きたように、積雪期に上流の火山が噴火し、融雪型の土石流が引き起こされたとしたら、その堤防は大丈夫なのか。仮に大丈夫だとして、その数千年間の維持をどうするのか? 景観や生態系はどうなるのか?

けれども、こうした立場を調整して合意を形成するのは簡単ではない。安全・安心とは何か、利便性とは何か、美しさとは何かといった価値の本質について事柄を定義し問題を共有する必要があるからだ。

そのためには、哲学や倫理学、歴史学、生物学や工学、あるいは経済学等々、広く人文学から自然科学までの知見

藤原書店

世界の悲慘 I 発刊

P・ブルデュー編 労働者、農民等「声なき声」に耳を傾ける。ブルデュー社会学の集大成。全3分冊 監訳＝荒井文雄・櫻本陽一 4800円

存在と出来事

A・パティウ フランス現代思想「最後」の巨人、最重要文献の完訳。「出来事」を数理的に擁護せよ！ 藤本一勇訳 8000円

都市と文明 I 発刊

文化・技術革新・都市秩序

P・ホール 都市の可能性を人類史的視野で描く、最高の都市論。全3分冊 佐々木雅幸監訳 6500円

ベルク「風土学」とは何か

近代「知性」の超克

オギュスタン・ベルク＋川勝平太 21世紀の「共生」を問う根本思想を徹底的に解き明かす。3000円

大陸主義アメリカの外交理念

Ch・A・ビーアド アメリカの「不介入」主義の積極的意義とは何か？「アメリカ外交」三部作の端緒の書！ 開米潤訳 2800円

いのちを刻む

鉛筆画の鬼才、木下晋自伝

木下 晋 鉛筆での表現を、ひとつの芸術作品に結晶させた画家、初の自伝！ 城島徹・編著 2700円

全著作

〈森繁久彌コレクション〉

1 道——自伝 [解説]鹿島 茂
2 人——芸談 [解説]松岡正剛
各巻600頁 全5巻 各2800円

月刊 機

B6変32頁 12月号 №333
P・ブルデュー／藤本一勇／木下晋／松岡正剛／伊東四朗／小林道彦／鎌田慧／石垣金星／王柯／加藤晴久／中西進／中村桂子 ほか。

年間購読料2000円(送料込) ◎見本誌・ブックガイド呈 ＊表示価格税抜
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL 03-5272-0301
ホームページ <http://www.fujiwara-shoten.co.jp/>

を総動員する必要がある。しかし言うまでもなく、こうした学問は、それぞれアプローチも違い、事柄の評価軸も様々だ。従って専門領域を超えた学術的なコミュニケーションが必要になるのだが、あくまで領域のメディアである学術雑誌ではその媒介的役割は果たせない。さらに言えば、こうした問題は市民一人一人に関わる事柄だから、いわゆる専門家に任せにするのではなく、当事者全てが学び考えることができる媒体が必要だ。そこで筆者は、「〈現場の哲学〉を構築するためのメディアとしての本」の重要性を主張してきた(鈴木二〇一六)。

■「学術書が世界を救う」気概での取り組みを

ここで話を研究評価に戻そう。災害現場に立ち尽くす人々に対して、研究者には何ができるのか。学問の価値が問われる究極的な場と言っているだろう。大学評価・研究評価とは、もちろん、資金や人事ポストを適切に配分する

ためのものではある。しかし、社会に対して学問は何ができるのか、というこの大きな問いを蔑ろにしたまま、大学や研究者が資源の分捕り合戦に汲々とする姿を晒しては、その資源の基盤を提供している社会から、学問が見放されることになる。

アメリカでは、一九九〇年代、人文学と社会の関わりを巡る問題が露呈し、研究・教育の面ばかりでなく、社会との広い関わり、すなわち研究財源や「アカデミズム」という組織「のあり方、読書や図書館、デジタル技術といった広い視点で、人文学者自身による問題の炙り出しが行われた(Kennan 1997)。冒頭に引いたハミルトンの論文の所在も、筆者はカーナンの本で知ったのだが、ここでは、ピアレビュという、同業者間での評価自体が持つ危うさも指摘されている。

評価である限り、信頼に足る方法を確認することは不可欠だ。しかし、その現場に「大きな問い」、すなわち同業

者を越えて、社会全体に自らの研究を接続する視点を持たないと、どんな評価も歪んでしまう。そして、「ジャーナル駆動型研究」ではその「大きな問い」は育たない。

——と、そこまでは良い。では昨今の学術書は、そうした越境性・社会性、筆者の言葉で言えば「二回り、三回り外」へ向けた力を持っているのかといえば、怪しいものだというのが、筆者が『学術書を書く』（鈴木・高瀬 二〇一五）を執筆した問題意識だ。本書は、若い研究者向けに書いたものではあるが、筆者自身も含めた、学術出版への自省の念を全ての頁に込めている。率直に言って、日本の学術出版は、全体としては学術界の抱える大きな課題に答えていない。「分かりやすく、親しみやすく」などという、歴史俯瞰的に見れば全く効果が無かったどころか、本離れを強烈に進めてしまった戦後日本の病理に絡め取られ、いわゆる「短小輕薄」に追い込まれて自らの頸を締める一方、例えば見出しや索引を丁寧に作ることで「二回り、三回り外」への可読性を上げるというような日常的な細かな努力を怠っている。『学術書を書く』が、予想を倍する好評を得たのも、逆説的に言えば、これまでの我々出版人への、研究者の不満の表れと言って良いのだ。

こうした日常の学術出版の在り方を見直すこと、また、英文による国際出版（鈴木 二〇〇三）、電子技術の適切な活用（鈴木 二〇一七）などに、正面から向き合い挑戦すること、こうした努力無しには、いくら「ジャーナル駆動型研究」

を批判しても、実践的には何ら意味を持たない。

「学術書が世界を救う」というタイトルで、二〇一七年、筆者は人間文化研究機構との共同イベントを企画した。その際、自然科学研究機構の小泉周氏は、研究成果公開の評価方法として「出版社を格付けする」というアイデアを出された。それには参加した出版関係者一同、言葉を失ったし、筆者も、その場ではさすがに両手を挙げて賛成することとはしなかった。だが、我々に学術書の意味を自覚した内在的な努力ができないのなら、外的圧力として「格付け」されるのも仕方ない、とも思う。学問も、そして我々自身も、大きな問いを取り戻さねばならない。

【参考文献】

- Cheney, L. (1991) Foolish and insignificant research in the humanities, *The Chronicle of Higher Education* (July 17, 1991) .
- Evans, J.A. (2008) 'Electronic publication and the narrowing of science and scholarship', *Science* 321, issue 887: 395-399, doi: 10.1126/science.1150473.
- Hamilton, D.P. (1991) Research papers: Who's uncited now? *Science* 251, issue 4989: 25, doi: 10.1126/science.1986409.



有斐閣 出版案内
(価格に税別)
東京・神田・神保町2 / Tel.03-3265-6811

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

社会学入門・中級編

稲葉振一郎著

四六判 1,900円＋税

理論から調査へと研究ストラテジーのトレンドが移りゆくなかで、いま学問が進みうる道とはいかなるものか。人文書読者のための再入門から、社会学初学者のステップアップまで。

ビット・バイ・ビット

デジタル社会調査入門

マシュー・J・サルガニック著
瀧川裕貴・常松 淳・
阪本拓人・大林真也訳

A5判 4,000円＋税

ビッグデータや集合知を使った新しいサーベイ法が、社会科学の世界を変えつつある。ビッグデータ時代の社会調査を、豊富な研究事例の紹介とともに、徹底的に解説。待望の邦訳！

知りたくなる韓国

新城道彦・浅羽祐樹・
金 香男・春木育美著

四六判 1,800円＋税

韓国がどのような来歴をもち、国としてどのような舵を切り、そして世間のふつうの人びとはどのように暮らし、どんな問題を抱えているのか。

◎図書目録送呈◎

荻谷剛彦(二〇一九)『追いついた近代消えた近代…戦後日本の自己像と教育』岩波書店。

Kernan, A. B. (ed.) (1997) *What's Happened to the Humanities?* Princeton University Press.

Ramasarma, T. (2014) *Trendy science research communications*, *Current Science* 106 (4) : 506-508.

佐藤郁哉(二〇一八)「英国の研究評価事業…口に苦い良薬か

フランケンシュタインの怪物か？」佐藤郁哉編著『50年目の「大学解体」20年後の大学再生…高等教育政策をめぐる知の貧困を越えて』京都大学学術出版会、二〇一三〇六頁。

鈴木哲也(二〇〇二)「肝心のことは問われているか…出版

部設置ブームの中で」「大学創造」一二号…二一七。

鈴木哲也(二〇〇三)「集約点」としての英文出版…我々は存

在意義を示せるか』『大学出版』五六号…一四一―一七。

鈴木哲也(二〇一六)「知のコミュニケーションの再構築へ…

学術出版からランキングと大学評価を考える」石川真由美編『世界大学ランキングと知の序列化…大学評価と国際競

争を問う』京都大学学術出版会、一五九―一九六頁。

鈴木哲也(二〇一七)「専門知の協同化のためのコンテンツ、

メディア、ビジネスを求めて…学術電子書籍の問題点と可能性を検討する実験から」『情報の科学と技術』六七巻一号…八一―一三。

鈴木哲也(二〇一八)「学術書を書く」から学術書を「読む」へ…

本を軸にした知のコミュニケーションの技法を考える』『大学図書館問題研究会誌』四四号…一三―三七。

鈴木哲也・高瀬桃子(二〇一五)「学術書を書く」京都大学学術出版会。

田中 克(二〇一四)「森里海の連環から震災と防災を考える」

『防災と復興の知…3・11以後を生きる』大学出版部協会、二九―四八頁。

橘 宗吾(二〇一九)「学術書を出版する意味…情報化のなか

の知識・流通・読者」『大学出版』一一八号…一五―二二。

テット, G (二〇一六)『サイロ・エフェクト…高度専門化社会の罟』(土方奈美訳)文藝春秋社。

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

大学出版部協会・今後の予定

一月一七日(金) 一四時

営業部会

一月一七日(金) 一六時

勉強会

「老舗学術出版社の生き残り戦略とは」

「ケーススタディ・創元社」

講師 水口大介(創元社第一営業部長)

於…東京大学出版会 第一会議室

二月二一日(金) 一三時

営業部会

於…東京大学出版会 第一会議室

二月二一日(金) 一五時

第五回 理事会

於…東京大学出版会 第一会議室

三月一三日(金) 一五時

営業部会

於…東京大学出版会 第一会議室

大学出版部協会フェア開催

一月五日～二月二五日の日程で同時期に関東・関西二つの生協で大学出版部協会フェアが開催され好評を得た。

今回、特筆すべきは、芸術書に特化されたフェア開催であったということ。実際に至るにあたっては、武蔵野美術大学出版局営業担当Iさんの企画立案から選書及び搬入手配まで獅子奮迅の活躍があ

ったからこそである。

今までも、大学出版部協会として、幾多のフェアを開催してきたが、ここまで一ジャンルに特化したフェア開催は稀である。こうした例を良机として、加盟社より今後も積極的に、新しい切り口からのフェア開催、協会事業での提案等を期待したい。

●東京藝術大学生協

『いま大学の出版社が面白い！』

美術と音楽の本」フェア



●京大大学生協ショップルネ
書籍コーナー
「デザインのチカラ
～デザインは世界を変える」



北海道大学出版会

▼岩下明裕著『世界はボーダーフル』

(B5判・六四頁・九〇〇円) 壁とフェンスに囲まれた地球。ボーダーレスな社会への夢は今や幻想に終わった。現実を乗り越えるため、世界を旅してみよう。

▼越野剛・高山陽子編著『紅い戦争のメモリスケープ―旧ソ連・東欧・中国・ベトナム』(A5判・二四八頁・三二〇円)

社会主義建国神話に積極的に用いられた「紅い戦争」に着目し、各国の事例を分析。博物館や記念碑、映画等で描かれる記憶の風景(メモリスケープ)の特徴を明らかにする。

▼冬月律著『過疎地神社の研究―人口減少社会と神社神道』(A5判・三七〇頁・七五〇円)

過疎化が地域の神社と信仰生活に及ぼす影響を、実態調査の追跡調査や、氏子調査、神職座談会、氏子のライフヒストリー等で究明。

▼鈴木幸人編著『かなしむ人間―人文学で問う生き方』(四六判・二九四頁・二六〇〇円)「かなしむ」は古今東西に存在してきた。かなしみと共にあることが人間の根源なのかもしれない。人文学でその諸相を問い、探る。

弘前大学出版会

▼李永俊・飯島裕胤編著『人口80万人時代の青森を生きる―経済学者からのメッセージ』(A5判・一六八頁・二五〇〇円)

人口80万人時代の青森をいかに生きるか? この切実きわまりない問題に対して、弘前大学人文社会科学部の経済学研究者7名が、真正面から向きあった注目すべき意欲的な論集である。



▼森樹男・高島克史・大倉邦夫・熊田憲編著『青森からはばたく!! じよっぱり起業家群像』(A5判・一四〇頁・一五〇〇円)

青森県を愛し、青森県のモノ・コトにこだわり、青森県の魅力を県内外に発信している「じよっぱり起業家」。どのようにして起業に至ったのか、どのような苦難に直面し解決してきたのか、「じよっぱり起業家」生の声をおさめた一冊。



東北大学出版会

▼高橋美能著『多文化共生社会の構築と大学教育』(A5判・二五二頁・五二〇〇円)

グローバル化が進む日本社会で、多文化共生を促進する大学教育のあり方について実践的な知見を詳細かつ多角的に検証。事例分析を通じ、多様なバックグラウンドを持つ学生が集まる多文化クラス内に、多文化共生を実現するために必要、且つ有効な学習環境、運営、学習テーマを提案する。

▼西田文信著『ナムイ語文法の記述言語学的研究』(A5判・二六六頁・七五〇円)

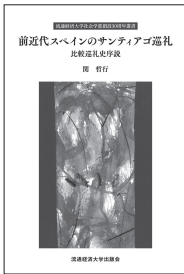
中華人民共和国四川省涼山彝族自治州冕寧県連合郷で話されているナムイ語ゾロ(冕寧)方言を対象言語としたシヨートグラマー。四川省西部の山岳地帯は川西民族走廊と称され、この地域に分布するチベット・ビルマ系諸言語を川西走廊諸語と呼ぶ。ナムイ語は川西走廊諸語の一つであり話者人口は約三〇〇人。本書はナムイ語の全体像を解明することを目指し、歴史的背景や社会言語学的背景も含め多くの現象について触れつつ記述する。文法記述、親族名称一覧、テキスト、語彙集を収録。

流通経済大学出版社

▼中山秀登著『民法の流れ図―総則―』【新版】（Ｂ５判・一六四頁・一六〇〇円）
二〇二〇年四月一日から施行される改正民法に対応した一冊。民法の全体と部分を、流れ図と図解をもちいてわかりやすく解説しました。



▼関哲行著『前近代スペインのサンティアゴ巡礼―比較巡礼史序説―』（四六判・二六四頁・一二〇〇円）本書は巡礼と密接に関連する民衆信仰、シンクレティズム、「観光」、慈善をキーワードに、前近代スペインのサンティアゴ巡礼を読み解こうとするものである。



聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・川並珠緒・関口明子・羽生和夫著『幼児理解と一人ひとりに応じた指導』（Ｂ５判・一一九頁・一五〇〇円）幼児理解の意義から指導計画、実際の指導法、指導要録等の書き方に至るまで、幼児理解と指導についてひととおり網羅できる一冊。経験豊富な執筆者が具体的な事例を用いて解説します。



▼聖徳大学特別支援教育研究室編『改訂2版一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援―』（Ａ５判・二四九頁・一六〇〇円）特別支援教育について、幼児期及び児童期に焦点を絞り、初期段階における適切な指導・支援を行うために、子どもの理解と指導・支援に必要な基礎知識を分かりやすく解説した最新版の特別支援教育本です。



慶應義塾大学出版会

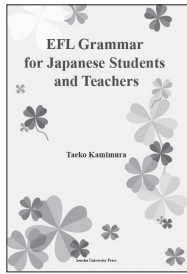
▼トニー・ジャット著／ジェニファア・ホームマンズ編／河野真太郎他訳『真実が揺らぐ時―ベルリンの壁崩壊から9・11まで』（四六判・五六〇頁・五五〇〇円）真実を追い求めよ。飽くことなく事実と真実を追究した知識人、トニー・ジャット。ニューヨークに居を移し、難病と闘いながら、彼は最後に何を語ったのか。

▼井庭崇編『クリエイティブ・ラーニング―創造社会の学びと教育』（四六判・六七二頁・三六〇〇円）クリエイティブ・ラーニングによって、私たちはどのような未来をつくることができるのか？子どもたちの創造力を育む、クリエイティブ・ラーニングの可能性について、気鋭の研究者・井庭崇が、鈴木寛、岩瀬直樹、今井むつみ、市川力という教育界のフロントランナーを迎え、徹底討論。

▼朝田佳尚『監視カメラと閉鎖する共同体―敵対性と排除の社会学』（Ａ５判・二〇八頁・四〇〇〇円）異物を敵視し、不安に揺れる私たち。なぜ監視カメラの急速な拡大が生じたのか。誰がその設置活動を担ったのか。日本社会の監視化の実態を鋭く捉えなおす力作。

専修大学出版局

▼Taeko Kamimura 著『EFL Grammar for Students and Teachers』（菊変型判・一三六頁・三二〇〇円）中学校・外国語の学習コースおよび高校・外国語の学習コースに取り上げられている一〇の文法項目をカバーした文法テストとアンケート結果を基に、生徒の文法能力をどのように育成するかを考察し、英語が外国語として教えられている日本の教室での文法教育の重要性を再考する。巻末には調査に用いた生徒向け文法テストと教師向けアンケートを掲載。



▼専修大学今村法律研究室編『神兵隊事件 別巻八』（A5判・三三八頁・五二〇〇円）昭和八年七月のクーデター未遂事件の資料集。神兵隊事件被告人訊問調書写・予審第一号室備付のうち神兵隊事件被告人訊問調書写（被告人・佐藤守義、鈴木善一の一部）を収録。

大正大学出版会

▼大正大学地域構想研究所編『地域人』（A4判・平均一四四頁・一〇〇〇円・毎月十日発売）「現代社会の最優先課題は、地域創生にある」をテーマに、地域の実態理解と再生の方法論をさまざまな視覚から紹介する地域情報満載の総合情報誌。第五十号 特集「本屋が楽しい まちが楽しい」■特集インタビュー・今井書店グループ相談役 永井伸和氏 ■鳥取県／本の学校 今井ブックセンター（米子市）、汽水研究所（湯梨浜町）、みつけどり（鳥取市）、定有堂書店（鳥取市） ■山梨県／朗月堂書店（甲府市）、カピバラ（甲府市） ■北海道／かの書房（札幌市）、書肆吉成（札幌市）、留萌ブックセンター（留萌市）、■岩手県／ORIORI（盛岡市）、BOOKNERD（盛岡市）、一頁堂書店（大槌町） ■高知県／金高堂書店本店（高知市）、高知蔦屋書店（高知市）、うずまき舎（香美市） ■熊本県／長崎書店（熊本市）、長崎次郎書店（熊本市）、橙書店（熊本市）、舒文堂河島書店（熊本市）他

玉川大学出版部

▼高井正・中村香編著『生涯学習支援のデザイン』（A5判・二二四頁・二四〇〇円）「人生一〇〇年代」において多様化する学習者を支援するための知識やスキルを学ぶ。豊富な実践事例を掲載。

▼田中雅文・中村香編著『社会教育経営のフロンティア』（A5判・二二二頁・二四〇〇円）地域づくり・社会づくりを支える人材や行政などの在り方を考察し、これからの社会教育経営の地平を展望する。先進的な事例を多数掲載。

▼中井俊樹編著『大学SD講座』大学業務の実践方法』（A5判・一九六頁・二〇〇〇円）大学職員の具体的な業務の実践方法に焦点を当て、業務に向かう姿勢や効率的な文書の作成と管理の方法、コミュニケーションの方法などを現場の職員の視点で体系的に提示する。

▼岡ノ谷一夫編／のだよしこ絵『玉川百科 こども博物誌』ことばと心』（A4判・一六〇頁・四八〇〇円）動物は、音やにおい、動きを使って気持ちを伝えますが、人間は「ことば」を使います。人間のことばと動物のコミュニケーションを比べ、人間のなぞをめぐろう！

中央大学出版部

▼紺野 剛 著『企業価値創造会計の理論と実践―日本トップ500社調査―』(A5判・二七二頁・二七〇〇円)(中央大学学術図書98)本書は日本の時価総額トップ500社を調査・検討して、企業価値創造会計を提案する。社会的関心が深まっている企業価値の基本概念の体系的な整理を試みながら、その背景に存在する重要因子指標を抽出・検証して行くプロセスを考察している。企業価値を具体的に測定する方法として、本質的企業価値、会計的企業価値、そして市場的企業価値と整理しながら、企業価値創造会計は、人的価値創造会計、顧客価値創造会計、株主価値創造会計そして社会価値創造会計と体系化している。人的価値の向上を通して顧客価値を向上させ、究極的には株主価値を向上させ、さらに社会価値を向上させる好循環の仕組みを創造することを支援する主として会計的なアプローチである。



東京大学出版会

▼齋藤慈子・平石界・久世濃子編/長谷川眞理子監修『正解は一つじゃない 子育てする動物たち』(四六判・三三六頁・二六〇〇円) ヒトを含めた動物の子育てを「進化」で読み解く新しい試み。驚異の戦略、親子の葛藤等の背景を描き、子育ての視点を変える科学的情報が満載。▼太田省一著『攻めてるテレ東、愛されるテレ東―「番外地」テレビ局の生存戦略』(四六判・二二〇頁・二四〇〇円) テレ東設立の歴史的経緯を辿り、テレ東が支持される理由を存分に分析。日本社会のテレビの将来的可能性を探求する。▼森畑明昌著『Pythonによるプログラミング入門 東京大学教養学部テキスト―アルゴリズムと情報科学の基礎を学ぶ』(A5判・二四〇頁・二二〇〇円) Pythonでプログラミングの初歩からデータ処理やシミュレーションの基礎を学ぶ。

▼下夷美幸著『日本の家族と戸籍―なぜ「夫婦と未婚の子」単位なのか』(四六判・三〇八頁・三六〇〇円) 戦後、家族単位の戸籍制度が成立し、人々は今も戸籍の制度と意識に振り回され続けている。戸籍と家族から日本社会を再考する。

東京電機大学出版局

▼東京電機大学編『世界を変えた60人の偉人たち―新しい時代を拓いたテクノロジ―』(A5判・一五二頁・二〇〇〇円) 今日の最新のテクノロジ―は、人類始まって以来の先人たちの努力の積み重ねの賜物。先人たちの思いや失敗や挫折、完成したときの感激や達成感、新しい真理を発見したときの喜びは、何ものにも代え難かっただろう。時代ごとに求められた技術は違い、それぞれに様々な社会的背景がある。人々の生活を大きく変え、新しい時代を拓いたテクノロジ―を産み出した先人たちのスピリッツや思いメッセージには、現代の私たちに大切なもの、貴重な真実を伝えてくれている。新しい時代を創造する未来の科学技術者に贈る書。



法政大学出版局

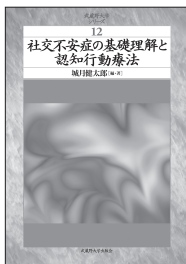
▼J・ラトナー・ローゼンハーゲン著
岸正樹訳『アメリカのニーチェある偶
像をめぐる物語』（四六判・六六〇頁・
五八〇〇円）ニーチェの哲学が二〇世紀
米国の文化やキリスト教、リベラリズム
やプラグマティズム哲学全般に及ぼした
大きなインパクトを跡づけた労作。

▼P・セザンヌ著 E・ゾラ著 H・ミ
トラン校訂・解説・注『セザンヌゾラ
往復書簡 一八五八—一八八七』（四六
判・五五八頁・五四〇〇円）二人の交流
について定説を覆す新発見の書簡も含め
現存するすべてを収録。カラー口絵付き。

▼F・ローゼンツヴァイク著 村岡晋
一・田中直美編訳『新しい思考』（四六
判・五一八頁・四八〇〇円）主著「救済
の星」刊行後に執筆されたテキストを主
に収録する日本独自編集のアンソロジー。
著者晩年の思考と実践の軌跡を集成する。
▼P・パーク著 長谷川貴彦訳『文化史
とは何か（増補改訂版第2版）』（四六判・
二五六頁・二九〇〇円）文化史研究の第
一人者による格好の入門書。初版の訳文
を全面的に見直し、さらに読みやすいも
のとなっている。

武蔵野大学出版会

▼城月健太郎編著『社交不安症の基礎理
解と認知行動療法』（A5判・一四八頁・
二五〇〇円）他者の注視を浴びることに
対する恐怖や不安を特徴とする社交不安
症について、その実態や心理学的なメカ
ニズムについて概観する。



▼田邊昌徳著『令和金融論講座』ピット
コインからマイナスイクスまで』（B5
変型判・六八八頁・五八〇〇円）日本の
金融の基本的な概念から、歴史、システ
ム、制度、政策など、金融のプロが解説
した詳説テキスト。この1冊で現代の金
融のすべてを学ぶことができる。

▼佐藤佳弘著『「実践力養成」わかる！
伝わる！文章力』（A5判・一五二頁・
一六〇〇円）小論文、レポート、ビジネ
ス文書など、書くことが苦手な方のため
に、すぐに使える文章の書き方をわかり
やすく解説した「虎の巻」！

武蔵野美術大学出版局

▼三浦均著『映像のフュシス』（四六判・
二五六頁・予価一八〇〇円）

著者は物理学天文学を学び、ムサビ映
像学科で教える異色の教授である。学生
に向けて「僕にとって、コンピュータグ
ラフィクスは世界を見るための一つの手
段です。僕の関心は、この世界と宇宙を
根元から理解したい、という動機に根ざ
しています。だれも見たことのない現象
を、目に見える映像にすること。見えな
いものを見えるようにすること、それは
世界を違う視点から見たい、というドキ
ユメンタリーやジャーナリスティックな
有り様に似ていると思います」と語りか
け、楽譜が読める能力と音楽を楽しめる
能力は異なるとしつつ、一つの世界を生
み出す創造の行為のためには、生命活動
を含めた自然現象に対する敏感な感性が
大切な才能になると説く。こうしたスタ
ンスから生まれた本書は、理系と文系の
垣根を軽く超え、無限を含んだ世界を幾
重ものレイヤーによって描き出す。たと
えば、浜辺に寝転がって夕日を眺めてみ
よう……ガリレオ「天文対話」からイス
ラームの文化へといざなう。

明星大学出版部

▼小川哲生・菱山寛一郎『**第二版 教育方法の理論と実践**』（A5・一六〇頁・一五〇〇円）教職を志す人々の参考書として、また教育現場に立つ先生の手がかかりとして、教育方法の理論と実践を融合させ、かつ教育課程の導入書として本書は作られた。それは、まず教育方法という学問分野の概略の確認から始まり、教育方法の概念と歴史、基本原理に触れる。そして、具体的に授業を展開する方法や技術の育成に力点を置き、授業の創造または改善に役立つ内容を扱う。

▼味形修『**子供とともに歩む生徒指導**』（A5・一六〇頁・一五〇〇円）生徒指導の積極的意義は「自己指導能力の育成」を通じて、個々の児童生徒の自己実現を図ることである。問題行動等の指導はその中の一つである。指導は児童生徒との信頼関係に基づかなければ効果がない。彼らとの人間関係のなかで信頼関係をどのように構築すればよいかは難しい課題である。多くの教員はこの課題を解決すべく実践している。本書はこの解決のために考えるべきことについて述べる。

早稲田大学出版部

▼伊藤滋監修 三船康道著『**密集市街地整備論**』（A5版・一六〇頁・一五〇〇円）東京都各区で狭隘道路の拡幅整備事業が実施されてから約30年経ったいま、その進展ぶりを探るとともに、ブロック塀問題、UR都市機構の貢献を報告する。



▼張碧惠著『**中華民国と文物**』（A5判・三三〇頁・四〇〇〇円）清朝末から革命期を経て中華民国末期に至るまで、中国国内の文物・遺跡は政変と戦乱とに翻弄された。時の政権は文物略奪や海外流出に対して文物をどのように保護したのか。

▼吉田徳久著『**環境政策のクロニクル**』（A5判・三八八頁・三五〇〇円）水俣病問題からバリ協定までの六十年余りの歩みを振り返りながら、環境問題の本質を読み解く。

関東学院大学出版会

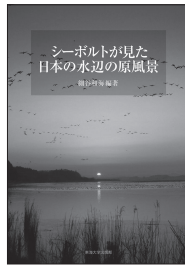
▼村椿真理著『**ベーシックなキリスト教概論**』（B5判・九六頁・一五〇〇円）「聖書の信仰思想」について学ぶことは、キリスト教信仰の本質に触れることであり、キリスト教とはどのような宗教なのかを知る最適な方法であるといえる。本書は歴史的なアプローチを試みながら、聖書学的成果を存分に取り入れつつ、組織神学的統一性を重視して、分かりやすくキリスト教を概説している。

▼関東学院大学現代社会科学部編『**社会学部で学ぶ―大学生のスタディスキルズ**』（B5判・一三六頁・二〇〇〇円）全国の大学で入学後1〜2年以内という早期に退学する学生が少なくない。その原因には、経済的な事由だけでなく、履修の仕方や勉強の仕方が分からない、学修や生活に関わるものも多い。本書はこのような現状をふまえ、新入生に対し、新しい生活と学部での学びへのスムーズな定着を促すことを目的としている。



東海大学出版部

▼細谷和海編著『シーボルトが見た日本の水辺の原風景』（A5判・二八四頁・三八〇〇円）シーボルトのコレクションを分類学的に再査した最新の知見と、ライデン自然史博物館所蔵未公開の文献資料を紹介し、彼の業績を見直す。



▼ヨシア・ウィラード・ギブス著／廣政直彦・林春雄訳『ギブス 不均一物質の平衡について』（A5判・四四〇頁・九〇〇〇円）アメリカの物理学者、理論化学者ギブスの代表的論文の本邦初の解説書。

▼立原繁・栗原啓『欧州郵政事業論』（A5判・二七二頁・二七〇〇円）万国郵便条約の規定により、「ユニバーサルサービス」として加盟国間で実施される郵政事業の現状と課題を、日本に先立ち導入された欧州各国の最新情報を、著者による現地調査を交え報告する。

名古屋大学出版会

▼広田照幸著『大学論を組み替える―新たな議論のために』（四六判・三二〇頁・二七〇〇円）何を守り、何を見直していけばよいのか。グローバル化・AI化が言われるなか、理念や規範をめぐる議論を避けることなく、教育の質、評価、学問の自由など具体的な問題に即して、リアルにねばり強く考える。

▼大河内昌著『美学イデオロギー―商業社会における想像力』（A5判・三七六頁・六三〇〇円）個々人が自らの情念にしたがって利益を追求する社会は調和しうるのか―近代英国の道徳哲学からロマン主義文学までを貫く問いとその展開を、多元的なテクストの精読により、批判的に跡づける労作。

▼伊藤真利子著『郵政民営化の政治経済学―小泉改革の歴史的前提』（A5判・三五八頁・五四〇〇円）戦後日本の発展と軌を一にし、隠れた福祉・再分配機能をはたした郵便貯金が、その巨大化の過程で抱え込んだ問題の核心とは。金融財政史の展開から民営化論の虚実を捉え直し、熱狂と混迷を生み出した小泉改革の歴史的位置を問う注目作。

名古屋外国語大学出版会

◎大好評、増刷出来

▼亀山郁夫・野谷文昭編訳『世界文学の小宇宙1 欧米・ロシア篇 悪魔にもらった眼鏡』（四六判・四〇〇頁・二〇〇〇円）亀山郁夫と野谷文昭、渾身のコラボレーションが生んだ悦楽の文学短編集。

▼佐原秋生・大岩昌子著『食と文化の世界地図』（新書判・二三六頁・一二〇〇円）地球の食の多様性を十四の地域に分けたコンパクトな「食文化地理学」。

▼城月雅大・編著『まちづくり心理学』（A5判・二〇二頁・一七〇〇円）「地域学会著作賞」で高い評価を受けた、地域再生理論・実践のエッセンス。

▼梅垣昌子著『フォークナー、フォークナー』（仮題・四六判・二五〇頁予定）気鋭の研究者が開く、知られざる傑作短編群から辿るフォークナー山脈の新しい登攀ルート。

▼川原浩司著『言語の構造―人間の言葉と動物のコトバ』（A5判・二五〇頁予定）人間の基本、言語の仕組みとは何か。チョムスキーによる生成文法などの方法論を駆使して言葉の骨格を提示し、新しい光を当てて。

三重大学出版会

▼竹田寛著・竹田恭子絵『続理事長の部屋から』(B5判・カラー・二三四頁・二七〇〇円・第2版)

著者が勤務する病院のHPに掲載された克明な植栽記。花が笑う瞬間の光と風を追いかけて著者が撮った写真の数は二万枚に迫る。植物の生態を読み解く科学的知見の情報がさり気なく満載されている。目次

平成28年(2016) 4月…タンポポ 5月…すいかずら(吸い葛) 6月…ちがや(茅萱) 7月…ねむのき 8月…むくげ(木槿) 9月…ひまわり 10月…けいとう(鶏頭) 11月…きんもくせい 12月…ユリノキ(百合の木)―街路樹の今と昔 平成29年(2017) 1月…ほとけのぞ(仏の座) 2月…冬木立 3月…プリムラ 4月…あおもじ(青文字) 5月…三つ葉つじ 6月…昼咲月見草 7月…紫つゆ草 8月…カンゾウとキスゲ 9月…おしろい花―動く遺伝子の気まぐれ行動 10月…エノコログサ 11月…秋の野芥子(アキノノゲシ) 12月…草紅葉(くさもみじ)―冬の陽は光の魔術師

京都大学学術出版会

▼田中二郎著『ブッシュマンの民話』(A5判・三〇〇頁・二八〇〇円)アフ

リカ大陸カラハリ砂漠、動物たちが語り合いだまし合い、軽々と人に変身する―これまで私たちが断片的にしか知ることのできなかった物語を、半世紀にわたるブッシュマンの生活を追いかけてきた著者が記録、語りのままに伝える。

▼M・メンドーサ、D・ヤコブス、B・ソヴァクル著／安田陽監訳『再生可能エネルギーと固定価格買取制度(FIT)―グリーン経済への架け橋』(A5判・

三二六頁・二七〇〇円)エネルギー産業のプレーヤーを変える革新的スキーム。誤解にまみれたFITの実態を明らかにし、環境と経済への恩恵を実証する。再エネを語るうえで必読の書、待望の邦訳。

▼直井里予著『病縁の映像地域研究―タイ北部のHIV陽性者をめぐる共振のドキュメンタリー』(地域研究叢書、菊判、三〇四頁・三二〇〇円)フィールド研究において急速に進む映像利用。映像作家として、HIV陽性者の日常に寄り添う中から、地域研究の道に進んだ筆者が、実践と理論から方法論の確立を目指す。

大阪大学出版会

▼中村瑛仁著『へしんどい学校』の教員文化 社会的マイノリティの子どもと向き合う教員の仕事・アイデンティティ・キャリア(『A5判・二八〇頁・四四〇〇円)社会的マイノリティが在籍する学校の教員たちがどのように子どもや保護者、職務と向き合っているのかをデータから明らかにし、子どもの社会的包摂にむけた教員の専門性、教員たちへの支援の方策を提示する。

▼竹中浩著『模索するロシア帝国 大いなる非西欧国家の十九世紀末』(A5判・二七八頁・四八〇〇円)ロシアはいかなる条件のもとで大国の地位を築いたのか。日露戦争までの四〇年間のヴィットを中心にとした政治思想を読み解く。

▼北田淳子著『原子力発電世論の力学 リスク・価値観・効率性のせめぎ合い』(四六判・四〇二頁・三五〇〇円)原発世論の実態を、長期継続調査に基づき明らかにした書。リスクや脱物質主義的価値観、経済効率性の面から人々の意識を分析。

関西大学出版部

▼吾妻重二編著『東西学術研究と文化交渉―石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集』（A5判・五一二頁・五七〇〇円）近代東洋学のパイオニアとして大阪文化研究に足跡を残した石濱の記念論文集。国内外十九篇の論考を収録。



▼干井洋一著『ダニエル・デフォー研究』（A5判・二四六頁・三五〇〇円）クルーソーを生み出した人物は才気溢れる異能の人であった。本書は英国作家デフォーがもつ多面性に焦点を当てた研究書。



▼カール・インスマン作 宇佐美幸彦・酒井友里共訳『チロルの悲劇―アンドレアス・ホーファー』（A5判・二七二頁・三一〇〇円）最強のナポレオン軍に勝利したチロル民衆の英雄ホーファー。チロル農民軍の勇敢な戦いと悲劇的結末。

関西学院大学出版会

▼神戸近代文化研究会編 K・G・りぶれっと No.48『新聞から見る1923年の神戸―大阪朝日新聞神戸附録の研究』（A5判・一二四頁・一二〇〇円）1923年の神戸附録から多角的に文化考察。

▼林香里 細見和之 石井伸介 細川周平著 K・G・りぶれっと No.50『いま、ことばを立ち上げること』（A5判・一〇四頁・九〇〇円）2018年に開催したシンポジウム講演録。

▼リスクデザイン研究センター／NPO法人リスクデザイン研究所編 K・G・りぶれっと No.49『復興から日常へ』（A5判・一三〇頁・一二〇〇円）災害で断絶した日常はいかに架橋されたか。

▼石野尚著『Feature Transfer and Feature Learning in Universal Grammar』（A5判・二三六頁・六四〇〇円）第二言語習得の過程に現れる言語文法の分析。

▼篠原道法著『古代アテナイ社会と外国人―ポリスとは何か』（A5判・三七二頁・三八〇〇円）古代ギリシャのポリスの実像に迫る。

広島大学出版会

▼寺垣内政一著『平面幾何の公理的構築』（A5判・一四四頁・八九〇円）本書では、一部直感的な理解に頼る（例：直線とはまっすぐな線、平面とは平らな面）日本の数学・幾何内容教育に一石を投じ、平面幾何を公理的に構築する。集合論の基本的な知識だけを用いて、ユークリッド幾何と非ユークリッド幾何を同時に構築する。現職の数学教員や教員志望の学生には特に知っておいてもらいたい内容である。二〇一九年三月刊。

▼宮川朗子・安川孝・市川裕史著『フランス大衆小説研究の現在』（A5判・一八一頁・一九〇〇円）一九世紀以降、安い値段で大量生産されたフランス大衆小説は、しばしば悪しき書物とみなされたが、広い読者層を熱狂させた。学校教育の場で教えられたり、大学の文学研究の場で論じられたりしてこなかったために、本格的に研究が始まったのは一九九〇年代のことである。未開拓の部分が多いこの分野の入門書として、近年の研究状況・歴史・参考文献をまとめた、コンパクトで便利な一冊。二〇一九年九月刊。

九州大学出版会

編集後記

特集はそうした疑問から出発した。

「書籍」を刊行することをどう評価できるか、をとくにピックアップした特集だった。研究者だけでなく出版人の存在意義に直結する部分だ。電子媒体で情報が流れる現代、書籍を出すことの意義はずっと問われつづけているし、我々が明快な応答ができているかは心許ない。たとえ議論のある評価方法だとしても、学術出版がどう見られているのか、営みを捉え直すひとつの契機になる。編集子は一出版人として、評価という軸で書籍の意義のゆらぎを考えたかった。ジレンマに答えが出たわけではないが、我々出版人に向けられる眼差し的一端はこの特集に現われている。一部は温かく、一部はごく冷やかな眼差しが。議論はもちろん書籍だけにとどまる話ではない。

学術情報流通のデジタル化が進展したなかで、計量的指標も必要だろう。しかし枠組みそのものを問い直しつつづける「学問」が、評価を怖れ評価に嵌められた枠内で縮小再生産を続けていないか、評価基準を設ける側は計量だけでは零れてしまうものを織り込もうとしているのか、常にもう一つメタな眼差しがあつてほしいと思う。出版はそのメタな可能性を追求する側でありたい。(〇)

▼佐藤慶治著『翻訳唱歌と国民形成―明治時代の小学校音楽教科書の研究―』(A5判・二四六頁・三七〇〇円)「仰げば尊し」、「蛍の光」などの翻訳唱歌は原曲歌詞からどのように翻訳されたのか? 唱歌教育における西洋文化の受容と改変に明治政府の国民国家創出戦略を探る。

▼赤司友徳著『監獄の近代―行政機構の確立と明治社会―』(A5判・四三四頁・六〇〇〇円)「監獄の誕生」の実態とは? 政治・宗教・経済など社会との関係の中で作られた明治期監獄行政の組織や仕組み、囚徒処遇の方針を追う。

▼木下寛子著『出会いと雰囲気』(A5判・二一六頁・四八〇〇円)今いる場所で見出した大事な問いをその価値や意義を見失うことなく問えるか。小学校への参与から始まる雰囲気の意味を求める試み。

▼荻野蔵平／トビアス・パウアー編『生と死をめぐるディスコース』(A5判・二六〇頁・二〇〇〇円)生と死をめぐる普遍的問題を、古今東西の文学や思想に見られる死生観と、現在の生命倫理の現場という二つの領域から総合的に考える。

経済が停滞した現在、国民が大学・研究に向ける眼差し、特に「お金」に関しては相当厳しくなっている。大学評価・研究評価が今まで以上に影響力を持ち研究者も神経質になってきたのは、冷ややかになりつつある眼差しに指標を示すことで応答せざるをえない、という状況が根底にあるだろう。その指標は誰が見てもわかりやすいものがない、と考えポイント制の発想に至るのも不思議ではない。本特集でも言及されているが、広島大学の「目標達成型重要業績指標(Key Performance Indicator)」(KPI)が発表された際にWEB(のなかの学問関係者)で議論が起こった。編集子もRPGゲームのように獲得したポイントや金額で学問を測ることに、抱いていた大学像がでんぐり返しを起こす音を聞いた気がした。が、しかし……様々な批判が渦巻くのを見るなかで、では我々はどう学問を評価すればいいのかが結局わからなくなった。計量評価への批判はよくわかるが、一方で質的評価を論じれば「総合的判断」になって基準は融けていく。批判はあるとしても、対案として誰か効果的な質的評価の在り方を示せているのか?

ダイニツク(株)	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル TEL 03-5402-1811
(株) 太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821
(株) 太 洋 社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111
(株) 竹 尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617
(株) 東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田猿樂町1-2-1 TEL 03-3291-1771
(株)とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200
東光整版印刷(株)	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15 TEL 03-3632-0801
東洋美術印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-6-2 TEL 03-3265-9861
(株) トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288
図 書 印 刷 (株)	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700
(株) 日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431
(株) 日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-6256-7528
日本宣伝販売(株)	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021
萩 原 印 刷 (株)	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12 TEL 03-3811-4272
(株) 博 報 堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711
藤 原 印 刷 (株)	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191
(株) 平 文 社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301
(株) 毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340
誠 製 本 (株)	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952
(株) 遊 文 舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325
(株)読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111
(株)ライトコミュニケーション	〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F TEL 03-3251-7571

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

(株) 朝 日 新 聞 社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749
亜 細 亜 印 刷 (株)	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858
(株) ア ベ ル 社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360
尼 崎 印 刷 (株)	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122
(株) A L E	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627
王 子 製 紙 (株)	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072
(株)加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281
城 島 印 刷 (株)	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102
(株)紀伊國屋書店	〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10 TEL 03-6910-0510
(株) ク イ ッ ク ス	〒456-0004 愛知県名古屋市熱田区桜田町19-20 TEL 052-871-9190
(株) 糸 川 印 刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811
(株)クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001
港 北 出 版 印 刷 (株)	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201
三 松 堂 (株)	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360
三 美 印 刷 (株)	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131
三 立 工 芸 (株)	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171
三 和 印 刷 (株)	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300
信 濃 印 刷 (株)	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601
(株) 渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185
(株) 眞 興 社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181
新 日 本 印 刷 (株)	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611
(株) 精 興 社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021
創 栄 図 書 印 刷 (株)	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288
大 同 印 刷 (株)	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550

大学生が遭遇しうる様々なトラブルを
民法・刑法・行政法の視点から読み解く。

学生生活の 法学入門

山下純司・深町晋也・高橋信行著

A5判 232頁 定価(本体2,200円+税)

押し売りや借金、ブラックバイトなど、学生時代に巻き込まれるかもしれないトラブルや、格差社会・家族のあり方といった世の中の身近な問題。こうした問題に直面したとき、法はその解決にどのように役立つのか。リアルで親しみやすいケースを素材に、民法・刑法・行政法それぞれのアプローチで解説。

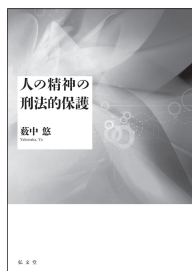


人の精神も刑法が守りうるものかを
問い直す！

人の精神の 刑法的保護

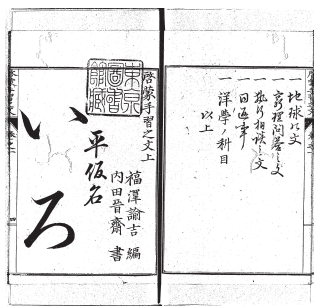
藪中 悠 著 A5判 320頁 定価(本体4,500円+税)

「刑法における傷害概念」と「人の精神的機能の障害」との関係について、日本における判例・学説の現状から析出される検討課題を、ドイツ・オーストリア・スイスとの比較法的検討および日本刑法の沿革的・系譜的検討をふまえて深く考察。PTSD など人の精神に変化・変調を生じさせる精神的障害と、失神など人の精神・意識を喪失させる意識障害等とに分けて検討。人の精神も直截的に傷害罪・各種致傷罪の保護法益であることを示した鮮烈なデビュー作。



弘文堂

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-7 ©表示価格は税抜
Tel. 03-3294-4801 / Fax. 03-3294-7034 <https://www.koubundou.co.jp/>



参考文献：日朝秀宜「福沢諭吉の出版事業：福沢諭吉」
<http://www.keio-up.co.jp/kup/webonly/ko/fukuzawayay/>

表紙写真：福沢諭吉編「啓蒙手習之文」
 (けいもうてならいのふみ)
 図版出典：国立国会図書館デジタルコレクション
 URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/852265>

福沢諭吉は自著の流通を既存の書店まかせにせず「福沢屋論吉」の屋号で出版社を経営した(1869-)。この事業は、教育機関としての慶應義塾と合流し、慶應義塾出版局の創設(1872)につながる。「啓蒙手習之文」は、1871年に「福沢屋論吉」から刊行された子供向け教科書。習字手本だが、地理、数学、歴史、理科など多様な内容を含む。

※季刊「大学出版」は、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードいただけます

大学出版 121号(2020年冬)
 2020年1月20日発行
 頒価 100円(〒共)

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
 ISSN 0913-3305
 振替 00170-8-389131

〒102-0073
 東京都千代田区九段北1丁目14番13号
 メゾン 萬六 403 号室
 TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
 E-mail: mail@ajup-net.com
 URL: <http://www.ajup-net.com/>

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

■ 北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
 北海道大学構内
 TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地
 弘前大学附属図書館内
 TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
 東北大学構内
 TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市長畑120
 TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

■ 聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
 TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

■ 慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
 TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
 TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西果嶋3-20-1
 TEL 03-3918-7311 FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
 TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
 TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
 TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局

〒120-8551 東京都足立区千住旭町5番
 TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

■ 法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
 法政大学九段校舎内
 TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20
 武蔵野大学構内
 TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
 TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
 TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

■ 早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
 TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

■ 関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
 TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部

〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
 TEL 0463-58-7811 FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
 名古屋大学構内
 TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

■ 名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
 名古屋外国語大学内
 TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

■ 三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577
 三重大学総合研究棟Ⅱ 3階
 TEL 059-232-1356 FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
 京都大学吉田南構内
 TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

■ 大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7
 大阪大学ウエストフロント
 TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
 TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
 TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

■ 広島大学出版会

〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
 広島大学図書館内
 TEL 082-424-6226 FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
 九州大学産学官連携イノベーションプラザ 305
 TEL 092-833-9150 FAX 092-833-9160